

新春 随筆



祖先からの贈りもの余話

クリニック絆
瀬尾 駿

県医師会報（平成21年9月号）に緑陰随筆として伊勢国津藩藤堂家と瀬尾家祖先との関係について投稿した事がございましたが、その続きでは新春に相応しくないのではと思いつつも、7回目の辰年でもありお許し頂きたいお願い致します。生前の母から瀬尾家は藤堂藩の御典医であったと口癖のように聞かされておりましたが、何か根拠がある訳でもなく、母の死後瀬尾氏累世過去牒にある曾祖父の戒名に5世の添書があった事などから、曾祖父一族の菩提寺が三重県津市専琳寺であることもわかり、その寺に出掛け寺の過去帳の存在を尋ねたのですがなにも判明せず、後ほどわかった事ですが昭和20年4回の米空軍爆撃で津市街は殆んど廃墟と化したと知り、万事休して諦めておりました。

今年2月も中頃でしたか、千葉市にお住いの全く存じ上げない方から封書を頂きました。文面には「パソコンで藤堂藩の御典医を検索中、沖縄県医師会報の文章が目にとまり、自分との共通点があったのでお手紙したが、祖先の一人が瀬尾瑞庵という方であれば藤堂藩の功臣年表に載っているとの事。この本は古書で一般書店では入手できず、三重県郷土資料刊行会に連絡し残部があれば入手できる」とありました。パソコンが普及し空前の情報化時代のお蔭か、これも祖先からの贈りものかと、千葉市の方には厚くお礼申し上げた後早速購入致しました。三重県郷土資料叢書第86集として昭和60年刊行され、表題は藤堂藩（津・久居）功臣年表・分限録（松村明編の大辞林に依ると分限帳の解説

として、近世大名の家臣団を対象とし、その一人一人について藩内における地位・格式・知行高・所領の内訳などを詳細に記した一種の人名録だとの事。編著者は中村勝利氏（明治38年津市生れの郷土資料研究家で故人）。内容は天正4年（1576年）から明治2年（1869年）の版籍奉還迄の293年間（途中資料が失われたのか欠けた年代もありますが）、藤堂藩に功勞のあった家臣の姓名と身分・禄高・扶持高の他、職種・簡単な経歴なども年代順に列記されておりました。瀬尾家の祖先かも知れぬ人物は、藤堂高猷公が襲封（諸侯が領地をうけつぐこと）された文政8年（1825年）から版籍奉還迄の44年間の650名ばかりの中に医療関係者が纏められた箇所があり、医師本道（漢方医術では内科のこと）26名、次の針医12名の中に20人扶持瀬尾瑞庵の名が2番目に登場、あと外科6名、歯医師1名の名が列記されておりました。功臣年表には総計3,200余名の姓名が載っておりましたが、医療関係者はこの部分だけで他に瀬尾を名乗る人物はいないからといって、瀬尾家祖先の一人と判定はできませんが、可能性が少しでもあるとすれば、5世である曾祖父の先代が文化9年（1812年）63歳で亡くなっており、この男性が4世瀬尾瑞庵ではないかと思われます。瀬尾家の過去牒には32名の戒名と死亡年月日・年齢が日にち別に分けられ筆書きされておりますが、俗名は記入されておらず、曾祖父一族の菩提寺に残る過去帳が戦災で焼失したと思われる今となっては確かめようもありません。しかし母の誇りでもあったのではないかとと思われる瀬尾家祖先の藤堂家御典医説を少しでも裏付ける史料を入手出来た事は、小生の駄文を掲載して頂いた沖縄県医師会報係の皆様のお蔭であり厚くお礼申し上げます。又吉報をお寄せ下さった千葉市在住のお方も小生と同じ目的で調べておられる様子ですが、ご幸運を心から祈りたいと存じます。



**辰年に因んで
沖縄戦と私、その後**
ノーブルメディカルセンター
仲村 宏春

人間60歳を還暦と云い、本卦返りを祝うものであるが、沖縄の格言には60代はニンヨリ（年弱り）70代はシチョーリ（月弱り）80代はヒーヨリ（日弱り）と云われ昭和初期の辰年生まれも既に80を越し、その語源そのものが現実となって心身共に虫食まれた状態となった。80歳を過ぎると次々と今までに親しく付き合ってきた友の訃報が目につくようになって来る。その度毎に吾が人生もそのものかと意を新たにすこの頃である。

思い起こせば吾々には輝かしい青春などはなく、戦時下の耐乏生活に追われ、その上昭和20年には戦争の矢面に立たされ、激戦の戦火をくぐって来た生き残りであった。

今を去る67年前、吾等県立第三中学校最後の在學生は毎日が戦争準備に明け暮れ、昭和19年から20年にかけては学業にいそしむ暇もなく、ペンを鋏やつるはしに変えて伊江島や読谷山飛行場の建設、山原の山岳戦に備えた陣地構築や壕掘りに汗を流し緊迫した戦争状態に対応してきたのである。戦局は次第に身近に迫り来るようになると、学徒も険しい戦局にまきこまれ、特に徴兵適齢前の満13歳から18歳の若輩共、それこそ紅顔の純情可憐な少年達が学徒隊として徴兵され、圧倒的優勢な米軍に戦いを挑み、悪戦苦闘の末、十数名が郷土防衛の盾となって、あたら十代の若さで花を散らさざるを得なくなったのである。

又現役入隊前の学徒は卒業証書を手にする事もなく現役召集され、学徒出陣して行ったのである。その大半は沖縄本島南部戦線はもとよ

り、遙か彼方の満州や、支那大陸、南方戦線に派遣されその大半が戦野に散りて、その遺骨の収集もかなわず、かの地に眠り続けている。

沖縄本島の古戦場をかけ巡ってみれば、その戦友学友達の顔が次々と目に浮かぶようになり、激戦の4月16日が来る度毎に過ぎし古の戦場を思い亡き戦友の俤を偲んでいる。

思えば彼の戦友学友達は悠久の大義に生くと心に秘めて散ったと思うが彼等も今は既に過去の人となりつつあり、彼等を語るには吾等戦友学友以外には語れるものは居ないと思ひ、如何にして彼等の魂を永遠に残し得るかと思吟する毎日でした。同期生会にはいつも逢う度毎にそれが話題となり、遂に彼等の33回忌を迎えるに当り、彼等の流した若い血潮を吸いとりて真紅に染まったあの戦場に彼等の思いを鎮めるため、吾等自らの手で鎮魂の碑を建てる事を決意し碑の建立を決定したのである。

当時本部町の真部山、八重岳は国頭支隊の本拠であり、最も激しい組織的攻防戦のくり上げられた由緒ある地で、学徒隊の殆んどはこの地で訓練を受け、そして昭和20年4月16日の激戦には十数名の学友がこの地で散華したのである。その意味でこの地は戦争の悲劇の根源とも云うべき地区であり、この地に彼等戦死者の魂と吾等生存者の心を結ぶ三中学徒の碑を建てようと意を決し、急遽八重岳の桜並木の中腹に三中学徒の碑を建立し、山野に散った88名の御霊の安らかに眠れる殿堂が完成したのである。

毎年6月23日の慰霊祭には御遺族の方々や多くの会員が参列し祭祀が行われている。然しその毎年行われる慰霊祭も漸次会員も一人去り二人去りで、遺族の方々も参列者は減り先細りとなってきた。

このままでは何時迄その祭祀続けられるか吾等一同の緊急課題として最善の策を講ずべく目下検討を重ねている所である。



スイムを楽しむ

沖縄中央病院
石垣 一彦

今年で七回目の辰年を迎えた。同じ年の者達に会うと「血圧が高くてね」「腰が痛くて何も出来ない」「物覚えが悪くなったさ」等健康に関する話題が多くなった。以前なら73歳の生年祝いを家族、親戚の人達が盛大に催したものだ、今では高齢者が増加して73歳は鼻たれ小僧でしかない。これからの健康な老後を考えるには適切な生活習慣、食生活、健康管理、体力増強等が必要であるが、小生の健康管理で自慢しているのはスイミングプールでの遊びである。あえて遊びと書いたのは私自身プール利用を水泳だけでなく、歩いたり、もぐったり、水中で体を回転させたり、水上で浮かんだり等水と戯れていることを楽しんでいるからである。

45歳頃に腰痛を感じ整形外科医に水泳でもしてみたらと勧められたが、あれ以来20数年経とうとしている。泳ぎ始めは数メートル泳いで息切れし、続けていく自信がなかったが、今では200メートル位は軽く泳げるようになった。お蔭で腰痛を感ずることもなく、体調は良く、風邪を引くこともない。各地にスイミングスクールが出来、幼児から高齢者まで水泳人口は増加している。目的も体力強化、健康維持、リハビリ、美容、仲間づくり、ストレス解消といろいろであるが、小生は健康維持を目的にし、無理しない程度にプール利用をしている。従ってまず水中歩行から始め、水泳はあまり体力の消耗を伴わない平泳ぎを主体にし、クロール、背泳ぎを少しずつはさむ様にしている。また体調の良くない時は運動量を減らしている。平均すると水中歩行と水泳は半々である。このプログラムを週2回、1回1時間を目標に実施している。

去年の1月インストラクターから「平泳ぎが

少しうまくなったので、マスターズ大会に出でみない」と声をかけられた。「大丈夫ですかね、先生」と不安に満ちた小生、「成績は気にしないでよいから貴方の出来る範囲で泳いでみたら、すこし考えてみて・・・」とインストラクター。考えた末、マスターズ大会へのエントリーを決め、平泳ぎの50メートル、25メートルに出場することにした。高齢なので勝負は度外視し、70歳代の年齢でどれ位泳げるか、一度自分の記録を作ってみたい、また、今までスポーツ選手として公の場での参加がなかったので、自分自身を鼓舞したい気持ちが参加の主な理由となった。

1週間かけて飛び込みを習い、試合当日を迎えた。スイミングスクール各校の応援が激しく、選手にも熱気が伝って来た。自分の出番が来て各コース毎に選手の名前と所属がアナウンスされた。私の所属するスクール席からも大きな声援が聞こえた。それに手を振って応援に応えたが、それは金メダリストの北島康介選手になったような気持ちであった。スタートの号砲が鳴ってプールへ飛び込み、懸命に泳いだか周りが全く見えず、あっという間に試合は終わった。成績はブービーと振るわなかったが、70歳代の自分の記録を作ったという満足感で一杯であった。その後応援席に戻ったら多くの人に握手を求められた。71歳の楽しいひと時であった。

今年もスイムを楽しみながら健康増進に努めていきたい。



新春雑感

嶺井第一病院
古謝 景春

沖縄県医師会の皆様方、新年明けましておめでとうございます。辰年生まれの年男（昭和15年生）として、これまでを振り返りつつ雑

感を書かせて頂きます。

私は辰年二回り目の昭和39年に千葉大学医学部を卒業し、インターンを経て昭和40年に千葉大学第一外科（大学院）に入局した。学生の頃から当時黎明期であった心臓血管外科に興味があり、この領域の実験的研究等が行われていた母校の第一外科へ入局した。当時の大学附属病院外科は第一・第二外科共に、一般・消化器外科手術がメインであった。私も一般外科と心臓血管外科の患者を受け持ち術前・術後管理に励み、大学院の実験は早朝および夜間に行うという多忙な毎日を過ごした。同時入局の同級生はいまでも毎年沖縄にきてゴルフを楽しむ永遠の友人であり、また医局では私の人生の師となる多くの先輩の先生方に接する機会に恵まれた。この医局生活の体験は、その後の私の医の原点となり、心の拠り所となっている。

ご承知のように、従来の大学の医局制度の非能率性が批判され、平成16年度から新医師研修制度が発足したが、都市地区を除く地域の医療過疎化を招き、早くも研修制度の更なる見直しが迫られている。私は大学医局におけるチーム医療の体験、先輩に対する礼節・後輩への思いやりの習得、臨床医学における実験的研究の重要性等、卒後教育の再認識が必要であると考えている。大学院修了後は関連病院である国立千葉病院へ出向し、外国留学をはさんで通算7年間勤務したが、症例に恵まれ、一般外科は食道切除・開心術はチアノーゼ性疾患まで術者として体験させて頂いた。この臨床体験が、その後の私の外科医として独り立ちする際の大きな糧となった。

辰年三回り目の昭和51年8月、郷里の琉球大学保健学部附属病院に赴任したが、着任早々から週1例のペースで開心術を行った。医師になって11年目、36才の若輩であり、多くの文献を頼りにファロー氏四徴症を含む先天性心疾患・連合弁膜症・冠動脈疾患・胸部大動脈瘤手術等を行い、昼夜を問わず術後管理に専念した。琉球大学医学部は昭和56年に医学科一期生を迎え、昭和59年10月から西原キャンパスの新

附属病院で診療を開始した。私は平成17年に大学を退官したが、在任29年間の心臓大血管手術症例数は4500例余りであった。この中でとりわけ手術成績向上のために取り組んだテーマは、「胸腹部大動脈瘤手術時の対麻痺予防策」・「Budd-Chiari 症候群根治術手術術式の確立」である。私は30才の時カナダにリサーチフェローとして留学し、動物実験の成果を臨床に還元する楽しさを経験したが、上記の臨床テーマにおいても、琉球大学第二外科の若い医局員諸君の多くの動物実験に基づく知見が大いに貢献した。改めて心から感謝申し上げたい。なお、我々の「Budd-Chiari 症候群手術」は米国の心臓血管外科テキスト Cardiac Surgery (Kouchoukas N.T.3rd Edition 2003, Churchill, Livingstone) に掲載されており、その根治性と成績が評価されたものと考えている。

最後に若い外科医の皆様「アイデアの99%はベットサイドにある。そしてベンチ（研究）で形にした後、再びベットサイドへ持って行く。そして初めて新しい治療が生まれる（スチューベン・アリストター）」という名言を送ります。



カルテは誰のもの？

よぎ東眼科
稲福 豊

昨年の正月は90才になって囑託医を辞め完全にリタイアした父と連れ立って、上海に行ってきた。那覇から2時間足らずで、東京よりも大都会（人口的には）が存在することに驚き、中国大陸の大きさに圧倒されました。父も唐旅（昔はあの世へ行くことを意味した）して帰って来たので、蘇えて後100年生きると宣言して1年が始まりました。4月には昭和医専の同窓会が京都で開催されて都をどりを堪能し、6月は九州新幹線に乗って桜島観光を楽し

であろう。しかし、少し前までは“これ位では疲れなかったのに”とか、“これ位の酒では二日酔いはしなかったのに”とか徐々に体力の衰えを感じつつも知らんふりをし、物忘れが進行し知力の衰えを自覚しつつも、まだ大丈夫と人事のように思っていたのが、“うーん、60年も生きてきたのか”と実感するのが“還暦”という言葉なのかもしれない。ここ数年、同級生も何人か亡くなり、年齢を感じずにはいられない出来事も出てきた。大学のクラス会も当初“10年毎に集まろう”であったのが、5年毎になり、卒後30年を超えてからは2年毎となった。やはり年齢を気にしてのことだ。

現在、少し夜更かしをすれば翌日に響き、少し飲みすぎれば二日酔い、ちょっと前の事を覚えていないのは当たり前、60肩で右肩の動きがままならない自分を見つめ直すのも“還暦”なのかもしれない。“体力の衰えは気力でカバーする”という言葉をよく耳にし、自分自身もそう思うがその気力もやはり年とともに衰えていく。体力の衰えを少しでもカバーしようと、30年ぶりに再開した空手の稽古も、気力がなく長続きしない。体力が衰え、気力も失っては本当に老年になってしまう。

後ろ向きの話ばかりになってしまったが、“体力の衰えを、気力でカバーする”ためには、気力を奮い立たせる“意義”すなわち目標を立てることが必要になってくるのではないか。“何時まで働くか”—とりあえず定年(65歳)までは働こう—という目標を立てる。加えて、働けるうちは今までやって来た事を継続努力する、麻酔科の発展、麻酔科医の充足、集中治療医学の発展・充実、集中治療医の充足はどちらも道半ばではあるが、働ける間はこの目標を持ち続けて生きたい。“何時まで働けるか”、それは神のみぞ知る。しかし、医師として働く以上、患者さんやスタッフに迷惑をかけずに働けるように努力することも当然必要である。

“定年までは目標を立てて頑張ろう”ということであらためて考えるのが、還暦の年頭である。



多くの出会いに導かれて

沖縄県立八重山病院
医療部長・内科 今村 昌幹

札幌で生まれ東京で育ち、北海道の旭川医科大学を卒業、中部病院での4年間の研修後に八重山病院勤務になりました。私の期から後期研修後に1年間の離島勤務が義務になって赴任したのですが、数年は勤務するつもりでいました。多忙な日々でしたが、一般内科医としての仕事に生きがいを感じ、いろいろな方の助けをいただきながら、1985年に着任以来27年間八重山病院で勤務を続けています。妻は八重山で独自の人脉を作り、手元には末の娘を残すだけになりましたが2男2女の子供たちにとっては八重山が故郷です。

医師である父の苦勞を見ていて、子供のころは仕事が大変な医者にはなりたくない、と思っていました。しかし、大学進学の際には、苦勞に値する職業だと感じるようになり医師を志しました。何年も浪人しましたが第二志望の旭川医科大学に合格できました。父や祖父が北海道大学(札幌農学校)の出身で、親戚がいて子供のころに何回も訪ねた北海道に進学したかったのです。卒後研修をした中部病院は、先に来ていた知り合いの先生から教えてもらいました。結核専門医の父が本土復帰前の沖縄に技術応援で来ていて、趣味で撮影したハミリ映画を見せてくれたので、沖縄について少しは知っていました。それでもエクスターンで中部病院に来たときに、空港からの道に外国を感じました。中部病院は補欠採用だったのですが、ただ見学だけでなく自分にできることをしたいと思って、ストレッチャーを押して患者搬送を手伝ったのを、師長が覚えていてくれたのが採用のきっかけのひとつだったとも、ずいぶん後で聞きました。

八重山病院に赴任したのも、中部病院研修医

3・4年次で応援をかねた八重山病院研修を経験していたからで、興味を持つ在宅医療もその時の経験がきっかけです。看取りの患者さんを家族が家に連れ帰ることが普通だったところに、死亡診断書対応のつもりで始めましたが、在宅での患者さんの笑顔に引かれて続けています。摂食嚥下に関しては、お年寄りにとって食べる事・栄養が経過に大きく関係することから、また認知症ケアについても最近になって必要があるので学び始めました。

人生60年間を振り返るとまるで旅のようです。私は訪ねた土地で宿の周囲や繁華街に生活のにおいがするものを見つけるのが好きです。思いがけない場所にとっても興味深い出会いが多くあります。いくつもの人生の転機で、行く先は自分で選んで来たつもりでいましたが、そのたびに出会いがあって導かれてきたことに気がつきました。振り返れば悔やまれることも多々ありますが、諸先生方に指導していただき、同僚・後輩たちにも助けてられてここまで進んでこられました。

還暦を迎えても、論語の「六十にして耳順ひ」（人の言うことを逆らわないで聴けるように）という域に達することはできませんでした。これからは受けるばかりではなく、次世代に何がしかを伝えることで先輩方への恩返しにさせていただきたいと思っています。

今回の執筆依頼が人生を振り返るよいチャンスになりました。これからの道がどうなるかわかりませんが、医者として八重山に住み続けるつもりでいます。

最後になりましたが、諸先輩がたのご指導に感謝するとともに、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。



今年の抱負

那覇市立病院耳鼻咽喉科
神谷 義雅

皆様明けましておめでとうございます。この言葉がお互いにいいあえる家族がいる方、知人、友人がいる方は、去年の3月11日に発生した東日本大震災にて被災されました方々を思うと例年になく改めてこの幸せが実感できるのではないのでしょうか。また被災者へのお見舞いと、1日も早い復旧復興を願うとともに微力ながらも援助したいと思う年明けです。去年当科にも被災地から遠く離れた沖縄県へ避難した家族が受診しました。この中で3歳の長男がハント症候群（皮疹の無いハント症候群）に罹患し入院しました。幸い治癒しましたが、3歳であってもやはり社会の大きな変化にそれなりのストレスを感じていたのでしょうか。病気は自分の家族、特に子供が患者になることは家庭内がいっそう重苦しい雰囲気になってしまいます。しかし、これが治癒した時の喜びは何事にも代えがたいものです。私の息子（次男）も先天性側わん症にて一昨年（平成22年）8月に東京の慶応病院で手術を受けました。約2ヵ月間の入院生活でした。東京には親戚もなく中学2年生のほぼ一人での闘病生活でした。出生時から疾患が改善した時の喜びは言葉で表せないくらい嬉しいものでした。そしてそのことは普段診療している時と違って自分が患者側の立場になると見えてくるものです。医師のひと一言が患者さんの家族の希望にも大きな影響を及ぼすことを実感しました。改めて自分自身の普段の診療への姿勢を振り返るきっかけになりました。私の出た那覇高校24期生の卒業後の集まりはのらりくらり会です。自分を含め同級生をみていると目標に向かってまっしぐらではないですが、ひたすらあきらめずにやりくりして達成していく性格が特徴と言えます。私は高校卒

業後から医師になるまで何年か遅れて医師になりましたが、この時も結局はあきらめずにきたことがよかったと思っています。この時の経験が今も目標に対する考え方が生かされているからです。

医師の卒後研修制度も始まっています。去年当院においても初代の研修生が10年経たことからその10年を振り返るといことでシンポジウムが初めて行われました。その席での彼らの発表を通しての10年間の成長には目を見張るものがありました。振り返って自分のこの10年間で日々成長してきたか、自分の置かれている立場から社会に貢献できているか、自問自答の日々です。

今年の干支は辰年です。還暦の年です。半世紀のさらに10年超えて生きてきたことになります。そうして今徐々に分かってきたことですが、(普通の方からするとちょっと遅すぎるといわれるかもしれませんが) どの時代も物事は自分自身で少しずつでもよくしなければ何も変わらないということです。でも決して欲張らずに大きな変化のみ追求することなく目標を一步でも進捗していこうと思っています。今行っている研究、聴覚、平衡覚のモルモットを使った実験においてもそう考えています。いまだに大いなる成果が導き出せないまま何年にも渡っている研究ですが、一生懸命今年も地道に取り組んで形として分かるような結果を出したいと思っています。ひとつでも病気が解明されていって患者さんの健康につながればこのような長年かけてきた苦勞も吹き飛んでしまうでしょう。

社会の医師への期待とその責務が厳しく問われている現代ですが、患者さんの治療に諦めることなく、真摯に対応することを念頭に置いて治療していきたいと思っています。そして最後に会員の皆様が今年もそれぞれ健康で患者さんへの治療に当たられ充実した1年を過ごされることをお祈りします。



とうとう来たか還暦

博愛病院
金城 博

子供のころは、着物姿にカンブウを結ったオジ、オーバーが普通に周りにいらした時代でした。もしかして、今の私ぐらいの年齢の方もと考えると、格好は変わっても、すごく年寄りに見られているだろうなど、改めて暦年齢を実感させられます。寄稿依頼がなければ、自分としてはまだまだ先のこと、全く他人事のように考えもしていない還暦でした。

しかし、根っからの楽天的性格と認知行動療法を使って、「還暦を迎えるけど、まだまだ還暦、こんなに若々しいし、仕事もバリバリこなせている。きっと自分は他人よりも老化のスピードが遅いに違いない。」と思うようにしています。新春の抱負ですので、少し御屠蘇気分、沖縄県の男性の平均寿命の改善に貢献すべく二度目の還暦を目指したいと考えております。

とは言ってもここ十年余りの男性平均寿命順位の低下には憂慮しています。中高年の自殺も一因となっているようです。精神科医になって三十有余年、患者さまの自殺は医師のアイデンティティーを打ち砕いてしまう程の出来事です。若いころとは違う、この年齢でないとできない精神科医療も有ると信じ、これからも微力ですが患者さまの幸せに貢献できるよう日々努力を続けたいと思います。

顔写真の掲載があることに今気づきました。修正もままならず、やっぱり還暦だねと言われないかと心配です。負け惜しみになりますが、いつも女性看護師さんからは「院長、ワカライ。」と言われます。



壬辰の出来事あれこれ

光クリニック 院長
金城 光世

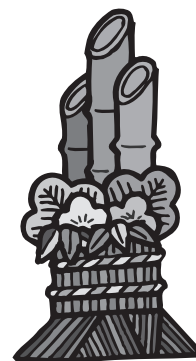
2012年壬辰（じんしん：みずのえたつ）還暦を迎える。60年周期の干支であるが壬辰の年の出来事を調べると1260年前の752年東大寺盧舎那仏の開眼法要、360年前の1592年明征服をめざした秀吉の朝鮮出兵いわゆる文禄の役（朝鮮では壬辰倭乱と称す）が起こっているが比較的大きな出来事は少ない。蛇足ながら壬申の乱（672年）で有名な壬申（じんしん）は「みずのえさる」で干支が異なる。生まれ年の壬辰1952年の出来事とはいうと、ボクシング界ではフライ級で白井義雄が日本人初の世界チャンピオンになり、ヘルシンキオリンピックで「人間機関車」といわれたザトベックが5,000m、10,000m、マラソンの三種目で金メダル、長距離三冠達成した。エリザベス2世の即位や米国初めての水爆実験もこの年。また12月5日から10日にかけてロンドンスモッグ事件があり、大気汚染が原因となる病気で12,000人の方が亡くなったとされ、大気汚染を真剣に考え直す契機となった年でもある。

1952生まれの著名人をあげると、野球では1975年（昭和50年）広島カープ優勝の際活躍した先発投手池谷公二郎、佐伯和司、抑え投手の金城基泰はいずれもこの年の生まれで、その他故小林繁、松沼（兄）、島本講平、大田幸司も同年生。サッカー選手で有名なのは当時世界最高峰のリーグであったブンデスリーガで日本人として最初に活躍した奥寺康彦。芸能人では男性が水谷豊、草刈正雄、三浦友和、伊ッセー尾形、ビーター、坂本龍一、グッチ裕三、さだまさし、鳥羽一郎、故河島英伍、なぎら健壺、女性が中島みゆき、小柳ルミ子、真野響子、夏木マリ、風吹ジュン、松坂慶子、桃井かおり等。アナウンサーでは楠田枝里子、田村美寿々、

小池百合子（現国会議員）。宇宙飛行士の向井千秋（元外科医師）。外国の俳優ではスーパーマン役の故クリストファー・リーヴ、ロビン・ウィリアムズ、スティーブン・セガール。囲碁界では小林光一。政治家ではプーチン首相。沖縄の声楽家新垣勉などがある。

1892年から1952年の私が生まれる前の60年間は、1894年日清戦争、1904年日露戦争、1914年第一次世界大戦、1931年満州事変、1937年7月7日の盧溝橋事件に端を発する日中戦争、1941年12月8日から1945年8月15日までの太平洋戦争と日本が戦争に明け暮れた60年であり、私が生きてきた1952年からの2012年までの60年は軍事的には米国の傘の中に安住、日本は直接戦争をする事はなくひたすら経済発展を目指すことができた。昨年は未曾有の天災を経験したとはいえ戦争のない平和な60年であった。

2012年からの60年はどのような時代になるのだろうか。近未来的には中国が米国をぬいて世界第1の経済大国になるのに10年もかからないと予測されており、軍事的にも世界第一の超大国になる。少し遅れてインドも日本をGDPで抜くであろう。21世紀は日本が主役とはならないアジアの時代が訪れるのだが、政治経済軍事的に米国に追従してきた日本はこれまでとは舵取りを変えなければならない事くらいは私にも想像はつく。個人的にはできる限り働いて自分なりの社会貢献をしつつ、子供のお荷物にはならないように果てたいがこればかりは神のみぞ知る処。





被災地陸前高田の「一本杉」と
私と同年の「辰年の杉林」

琉球大学医学部附属病院

地域医療システム学講座

小宮 一郎

題名を読んで奇異に感じる会員の方々もおられると思うが、陸前高田の有名な「一本松」ではなく、「一本杉」の話から始まり、干支の辰年に因んでの三題噺的な新春干支随筆とさせていただきます。

医師の偏在による地域医療崩壊が進行している中、国や県並びに琉球大学では地域医療の再生に取り組んでおり、医学部医学科では毎年地域枠入学12名を受け入れている。彼らの多くは自身の将来や沖縄の医療に対して高い問題意識を持っており、私たち教員も教えられることが多い。私は彼らの教育にも関与しており、昨年9月には東日本大震災被災地の岩手県陸前高田市を学生と共に実習目的に訪れた。ご自身も被災された陸前高田病院の石木幹人院長や職員達が懸命に医療を実践している様子を間近に見て、さらには被災者の方々との交流を通じて、彼らの不屈の精神にはとても勇気づけられ、まだまだ日本は大丈夫であると実感した。

この陸前高田では高田松原の松が一本だけ残っていたが、この場所から少し内陸に入った荒れ果てた市街地に、たった一本の杉がテッペン付近のみに葉を残しながらポツンと立っていた。その一帯は以前杉林だったとのことで、被災者の老婦人に伺ったところ、この杉林の近くの交通信号機を超えて遥か高い津波が襲来し、この方は津波に追われながら必死に逃げたとおっしゃっていた。我々が訪れた時には杉林は一本を残して跡形もなく、もちろん信号機や家もない状態であった。以上が陸前高田の「一本杉」の話である。

杉と言えば、私の郷里の山（山梨県大月市、リニア実験線のすぐ近く）に私と同年の「辰年

の杉林」がある（はずである）。1952年の辰年に祖父の指示で私の誕生を記念して植えたと聞いているが、実際に私がこれらの杉林を見たのは小学生6年生頃で（正に辰年）、当時は幹の太さが15cmほどしかなかったと記憶している。今年はちょうど樹齢60年になる訳で、どのくらいの幹の太さになっているのかもわからない。日本各地の山林の状況と同じく、かなり荒れた杉林となっていると思われる。

この杉林を妻と共に本年中に是非とも訪れてみたい。下草刈りなどはできるはずもないが、私と同年の杉林を見るのが今から楽しみである。私自身も退職までに枯れることなく、現在の仕事にベストを尽くせねばと思っている。大学に在職する以上は学術論文も書かねばならない。次の辰年までに、あと何篇の学術論文が書けて、どれだけ社会に貢献できるのだろうか？

最近の医学部の教員動向を見ていると、特に内科系では、ほとんど学術論文のない方が講師や准教授に推薦され、すんなりと教授会などを通過している。私自身も大きなことは言えないが、研究費を使って研究はしているようであるが、結果としての英文での学術論文が出ていない。博士論文には英文で内容の良いものを発表されているのに、その後が続いていないように思う。日常臨床に忙しいことは認めるが、学会発表だけで満足してはいないだろうか？学術論文で残すことは大学に在籍する医師の最低限の仕事であり、これが無理なら、地域に出て、沖縄の医療の為に貢献すべきであろう。私より一回り・二回り若い48歳～36歳の年男・年女の方々には正に論文を量産できる年代であり、是非とも頑張ってもらいたい。陸前高田の「一本松」は昨年暮に枯れてしまったと聞かすが、「一本杉」や私の祖父の植えた「辰年の杉林」は後世に残っていく。沖縄発・琉大発の学術論文もまた然りである。あと2回ぐらいしか年男になれない先輩からの激励の言葉としたい。



還暦に寄せて

大浜第二病院
田中 康範

謹賀新年。めでたさも 中くらいなり おらが春（一茶） といったところか。

今般新春干支随筆の寄稿依頼を頂き、めっきり薄くなった白頭を掻きながら筆を執っている。紅顔の少年もいつしか60歳。とうとう還暦を迎えた。少年老い易くガクッと成り易いことを実感するこの頃である。50を境に急速に体力が衰え、50半ばで氣力が萎え、60にして知力も愈々怪しくなってきた。残ったのは借金と年の功ぐらいだ。

永遠の若さは人類の夢。アンチエイジングが持て囃され、胡散臭い話題に事欠かない。染色体の端にテロミアという物質があり、これを操作することにより千歳長寿も夢ではないという。あと100年長生きできる薬が開発されたら売れるだろうか？恐らく否だ。生きること＝難儀であることを大方の人は知っているからだ。一方『あと10年今の若さを保つことができる代わりに10年後100%ポックリ逝く妙薬』があったらどうするか？少し食指が動く。統計学上60歳の私の平均余命は23年間。『60歳の若さを保ったまま10年間限定』と『確実に自然に老いて行く、統計学的にのみ保証された23年間』どちらを選ぶか？

終末期の患者を扱うことが多い現場で、不自然な生や死と対峙する機会が随分増えた。所詮、自然の摂理には逆らえない。

光陰矢の如く60年が過ぎ去った。戦後のどさくさの中、私は那覇市のスラム街の様な所で生まれ育った。戦争を知らない世代であるが戦争のツケだけは大きいに背負わされ生きてきた。赤貧洗うが如く何も無かった。特に食いが無い事には辟易した。反面、塾とか、習い事など無縁の世界で、野球、パッチー、ビー玉に明け

暮れ毎日が楽しく、貧しさとは裏腹に心の中は夢と希望に満ち溢れていた。そんな少年の頃の遊び癖が今でも時々目を覚まし多少問題ではあるが…。

高校3年に上がる春休みに医学部に行く決心をした。子供の頃医者と言えば野口英世、北里柴三郎である。余りに崇高な世界に思え、医者になろうと思ったことはなかった。受験が差し迫り医学部志望へ心を動かしたのは幼少時代に味わった貧困だったのであろうか。

祖国復帰が1ヶ月前に迫った昭和47年4月秋田大学に入学。とにかく寒かった。風呂無し安アパートで、銭湯までは遠い。通うのも大変だったので風呂に入るのは日曜日だけ。卒後は中部病院で研修した。体力のみが頼り、体育会系のノリの過酷な修行である。やはり忙しくて週に一度しか風呂に入れなことが多々あった。都合8年間ろくに風呂に入れなかったことになる。でも不思議なことに一度も皮膚病には罹らなかった。

学生時代、休みに帰省の折々後学の為、桜坂に足を運んだ。復帰前1本1ドルで飲めたビールが千円に跳ね上がっていて、タマシヌギタ。そんな飲み屋で初めて8トラックのカラオケに出会い心を奪われ、生涯の友となった。色々な趣味を遍歴したが40年もたゆまず続けているのはカラオケぐらいだ。

長年温めて来た夢がある。『海を眺める小高い丘で畑を耕すこと』だ。最近南の地に小さな土地を求め、夢を叶えた。週末ハルサーをして野菜作りにはまっている。今流行りのメタボ、ロコモ、ウツを防ぎ、老後の健康増進に大いに役立つであろう。

何はともあれ還暦という人生の大きな節目を迎えた。多くの人に助けられ、どうにかここまでたどり着き感謝に堪えない。これから先、医師として人間として如何に生きべきか日々煩悶、模索している。還暦とはいえ赤子のように無垢にはなれない。天賦の才も時間も限られている。『余生はおまけと心得、頑張るけども無理しない。腹は七分に人生八分、平凡な日常が

あればそれで十分』それが還暦を迎えた私の原点である。



**新しい人生の出発点にて、
まずは反省から**

辻田労働衛生コンサルタント・
産業医事務所 辻田 敏

我が国では還暦祝いに赤い頭巾やちゃんちゃんこを贈りますが、昔は魔除けの意味で産着に赤色が使われ、還暦は生まれてきた時に帰るという意味でこの慣習があるそうです。つまり還暦は新しい人生の出発点ですが、その前に悔い多き人生を回顧してみました。

私は石川県七尾市に生まれました。日本海に面し魚が旨くのんびりした土地柄です。地元の高校をでて金沢大学薬学部に入學し大学院修士課程まで進みました。大学院をでて昭和52年はひどい就職難の年でしたが幸い指導教授の推薦をうけて大手家庭品メーカーに入社し北関東にある研究所で研究開発を担当しました。その頃に開発した商品が20年以上たった今もスーパーやドラッグストアで売られているのが少し自慢です。

就職後すぐに結婚し20代後半に子供が生まれました。その頃は仕事が楽しくて連日夜遅くまで残業しましたが若くて体力があり疲れは感じませんでした。しかし30代で役職についた頃から人間関係の軋轢に悩まされ不眠や体調不良が続きました。社員の健康に配慮のある会社だったのですが、仕事ストレスへの対応は十分とはいえませんでした。

ならば私がストレス対策を指導できる産業医になろうと無謀にも決意し、昼は仕事をこなしつつ夜や土日に猛勉強して38歳でついに大阪大学医学部に合格しました。妻と二人の子供たちもよく協力してくれました。

平成3年の春に北関東の宇都宮市から関西の

奈良市に移住しましたが、生活習慣の異なる関西での暮らしに家族はずいぶんと苦労したようです。一方、医学生になった私はさながら人生の夏休みのような気分でした。老化で記憶力が低下した脳に膨大な医学知識を詰め込むのは大変な苦労でしたが、若い同級生たちと切磋琢磨しながら平成7年に医学部を無事卒業して42歳で医師になりました。初期臨床研修では私よりも歳の若い指導医の先生方や看護師さんたちに苦労をおかけしました。すみません。

臨床研修を終えて産業医学に軸足を移した頃、突然スギ花粉症を発症しました。ちょうど環境医学（衛生学）教室の助手に採用されてストレスと免疫の関連を研究していた頃で花粉アレルギーも調査していたのですが、まさか自分がそんな病気に罹るとは思いもよらず、皮肉なものです。その後大学を離れて病院で働くようになっても病状が年々悪化し春先には鼻炎や咳で息も絶え絶えの有様で、これ以上悪化させると危険だと判断して平成19年にスギ花粉が飛ばない沖縄へ移住を執行しました。子供たちからは仕事や大学があるから行かないと言われ、妻と二人だけの移住でした。

移住先の那覇では日本郵政の専属産業医の職を得てついに仕事ストレスと正面から向き合うことになりました。産業医になろうと志してから20年あまりの年月が経っていました。幸運にも日本郵政には沖縄県総合精神保健福祉センター所長の仲本晴男先生が非常勤産業医として勤めておられ、ご教授頂いたうつ病の認知行動療法が休職者の職場復帰支援に役立ちました。一方うつ病による休職者を減らそうと県内各地の支店で実態調査を行ない、上司が部下を支援する職場ではうつ病率が低いことを明らかにして第32回沖縄精神神経学会で発表したところ好評を得て学会奨励賞を頂きました。郵政産業医を3年務めた後、平成23年4月に労働衛生コンサルタント・産業医として独立し、現在は複数の企業で嘱託産業医を務めています。

これまでの人生では知人や友人、家族に支えられて苦境を乗り越え、その御蔭で念願の産業

医になり今に至っています。ですから、還暦からの新しい人生では「ひとを支える」ことを私の目標にします。そのためには健康第一、まずは体力づくりから始めようと思います。



在宅医療への 取り組みから老化を思う

浦西医院
仲間 清太郎

このたびの東日本大震災により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被災地の一刻も早い復興をお祈り申し上げます。

十二支でいうと、今年は辰年。「辰」にてへんをつけると「振」・・・振動の振。「揺れ動く」「変化の年」「活気を取り戻す」「モノより心の重視」といろいろある。

私も還暦を目前にして思いはせてみた。

気持ちは三十代だが、時は否応なしに過ぎていき「老」への突入を突きつけられる。体力の衰えも時折感じさせられるこの頃である。

ここで一度心をリセットし、折れそうで折れない心を持ってこれからの人生を過ごしたいものである。

思えば開業して十八年が過ぎた。医療を取り巻く社会の変貌も著しく、高齢化もまたたくまに進み、今や外来の患者さんは老人の集団ともいえる。私もその一人と言えようか？

在宅支援診療所を始めて3年が経過した。特別養護老人ホームから締め出しにより、宅老所・有料老人ホーム・高齢者専用賃貸住宅など家族でケアできない老人が多数さまよっている現状である。それも限られた老人しか入所できないのが実情である。

二週間に一度の訪問で月に2度診療をさせて頂くのであるが、老人の病状は安定しているかと思うやいきなり急変することが多く、迅速な対応を迫られることが多い。24時間対応という

こともあり、なかなか気が抜けない。出張やゴルフの時もコールされることもしばしばある。

しかし、老化、自分で自分のことがままならない・・・これは自然のなりゆきでもある。動けなくなることは罪なのか？いや、そうであるはずがない。これは誰もが辿る可能性を否定できない道でもある。

だとすれば、クリニックの主治医たる私がなすべきことは、最後まで患者さんと可能なかぎりおつきあいすることではなからうか？

私の母も92歳の老人であり、宮古で他人の世話を受けている。家族介護が充足されない場合、人様の力を拝借できることはありがたく感謝せねばならない。そういう私もいつかは自分がままならない時がやってこよう。

いつしか人様の世話にならざるを得ない時の為に、今は一生懸命患者さんの診療に心を尽くして行こうと思う。

翻って、いや、まだ私は老人ではない。初老といえども「老」は認めたくないのが本音でもある。まだできること、やりたいこと、いろいろある。まだまだ若者に負けてはいられない。心をリセットすれば新しい自分の道が見えてくるはず。これからの自分に期待したいものである。

クバ笠は世界を巡る

川根内科外科
比嘉 司

幼少より、地図と歴史書が好きだった。半ば道間違え、医者になったがナースも海外旅行に行ける時勢に、このまま朽ち果てるか、過労死かと悔やんでいた。憧れは世界遺産やシルクロード、名曲アルバム、など書籍とDVDの形で集積されたが、所詮、国内それも脳内での話であった。時間と金のないのが縁の切れ目でバツイチになった頃良きパートナーに巡り合い、現

職場に転職した。当前のことだが時間と金が入るとあれほど憧れだった海外旅行がいつも簡単にできるようになった。最初は東京より近い韓国、ここからデビューした。エンジンバラの駅を出ると建物間に隙間がなく思わず叫んでしまった。セビージャではフラメンコに感動した。以後、連日行き先々の街でそれを堪能した。最初のシルクロードへの旅は西安から始まりカシュガルまで赴いた。30年来の憧憬が連なり、毎日が保存できない上書きの連続だった。井上靖のように号泣こそしないまでも敦煌、鳴沙山には潤むものがあった。ドナウはモルダウがフィヨルドにはグリーグが良く似合う。ヒバ、トレド、サンクトペテルブルグ、イスタンブールなどは街全体が世界遺産でそのスケールの大きさには驚いた。鎌倉芳太郎の戦前の写真では首里と城下町は米軍の10.10空襲がなければ十分に世界遺産に値した。現首里城は沖縄サミットの御祝儀のため外交機密費で登録されたと思っている。世界遺産とのことで訪れる観光者には気の毒だ。個人的には慶良間から与那国までの海が十分に世界自然遺産に相当すると思っている。実は波照間島に出向いた時、釣り、マラソンに愛用していたクバ笠をかぶった。以後10回目のチベットからクバ笠で世界を巡っている。ポタラ宮殿は山合の秘境にあることを想像したのだが、拉薩のシンボルとして街中にあった。親切なチベット族は日焼けして信仰に厚く五体投地でポタラ宮を周回している。漢民族のせいで自由にポタラ宮に入れなく、いずれ暴動が起こるだろうと予測していたらそうだった。新疆でも似たようなことを感じた。アメリカ人をみると性悪説だがブータンでは性善説を信じた。未登録だがブータンのゾンは紛れもなく世界遺産クラスだ。彼らは其の誘致運動すら知らない。アメリカ資本のホテルが建設中なので日本のように邪悪に染まるのは時間の問題か、行くなら今の内だ。ブータンは国民の95%が幸せと、貴方の幸せが自分の幸せという平和な国だ。インドはカオスだったがブータンはコスモスだった。

イスラムの国々を全て回った訳ではないが治安は日本よりはるかに良く、ウズベキスタンの人々の目はずっと輝いていた。バスに乗っていてもこちらに手を振って会釈している。沖縄の離島のような道行く女性の歩き方が美しく、何名も動画に取り込んだ。イスラム社会への恐れは多分に日米のプロパガンダと確信している。今までのところホームレスの一番目立った国は日本であり、駅ホームで最前列に並べないのも日本だ。ロベン島に16年収監されていたマンデラ元大統領の牢獄をみると私なら3日以内になぶり殺されていると思った。

クバ笠は何処でも目立ち行き先々でかぶせてくれ、ツーショットしてくれ、果ては厚かましくも譲ってくれ、と大人気だ。今にYou tubeで目撃者の投稿欄が出来るかもしれない。帰国後はこれに想いを込め印象を書いている。各々の紀行文は字数制限上タイトルから想像して頂きたい。10 天空への旅、11 インカの空中都市、12 密林の遺跡、13 アドリア海の真珠、14 ベドウインの幻影、15 龍の降りた湾、16 シルクロード、オアシス、17 野生動物とビクトリアの滝、18 皇帝たちの栄華、19 氷河の掘削、20 ヒマラヤの仏教王国、21 葡、英国の東洋への土産、22 クルカンの降臨とチャックモール、23 玉葱尖塔教会とツァーリの宮殿、最近、“ここ行った”、という画面がTVで散見できるようになり、うれしいのだが、そう、まだ数えられる回数だ。パスポートも大分余白が少なくなったがまだ1冊目だ。余命は少なくなったのに



2011.8月 ロシア・キジ島、世界遺産木造教会

行きたい場所は思いつくままこの3倍以上ある。そして、増え続ける。ここ10年で世界遺産は2倍に増えた。体力がいつまで持つか？問われている。因みに私の中の世界遺産ベスト5は ①アンコールワット、②テオティワカン、③敦煌、鳴沙山、なんと④がああのマチュピチュだ。⑤ピョートルのペトロゴフ、感動するにも体力が必要だった。

私より若い人の死亡が目につく、医師会報も死亡欄からみるようになった。自身、若き頃、遭難死寸前が2回、老いてからも2回、死に直面する大病を思った。後、何回クバ笠は世界に披露できるかわからないが今年もクバ笠で世界を巡るつもりだ。



辰いろいろ

みどり耳鼻咽喉科
辺土名 仁

今年の干支は辰。私も還暦を迎え老人の仲間入りなどと揶揄されるが、当方はいたって平気である。まだ心身共に若いつもりなので、これからは頑張れそうである。干支にちなんでいろいろな辰について述べてみたい。

干支。私が辰年を意識したのは幼稚園生の頃であった。「あの人は寅の人だから何歳」などと干支で年を数えていたお年寄りが、「あんたは辰だよ」と教えてくれた。その時私は「僕一人が辰なのだ」と思い込んだ。幼稚園で同級生の仲程一博君（八重山で奇しくも耳鼻科を開業中）に「僕は辰だよ。君は何なの？」と質問したら、返ってきた言葉が「僕は辰だよ」であった。辰は一人しかいないはずだが、なぜ彼も辰なのだろう？家に帰って母に尋ね、その時初めて干支について教えられた。50数年前の話だが、今だに覚えている干支の事始めである。

タツノオトシゴ。中学生の頃、与那原の浜で

タツノオトシゴを見つけた。背びれを懸命に揺らして立ったように泳いでいて、その姿はまさに“竜”であったが、動きはにぶくて簡単に捕まえることができた。エビやヒトデの仲間間違われることもあるようだが、エラもヒレもあり、れっきとした魚類である。トゲウオ目タツノオトシゴ属（Hippocampus）で海馬の別名もあり、英語ではsea horseと言う。最近注目を浴びている大脳辺縁系の“海馬”も同じスペルで、形態が類似することから医学的にも同名が付けられている。

たつみ会。与那原中学校時代の同級生15名が集う模合の会である。高校卒業時に結成されたので、かれこれ40年余になる。新聞に“ザ・モアイ”という記事が載るが、それらに決して引けをとらないロング模合である。町内の居酒屋で毎月1回集まるが、心は全員中学生に戻る。職業はさまざま、飛び交う会話は方言が多い。方言しか話さないメンバーがいるが、「君もたまには共通語を話してみー」とからかわれる。現役校長が品のない方言を使うと「おまえはほんとに校長やるばー？」などと非難を浴びている。遠慮のない実に楽しい会である。

燃えよドラゴン。言わずと知れたブルース・リー主演のカンフー映画で、私が大学生の頃に一世を風靡した。映画が終わって出てくる観客の足取りが、彼のステップに似てくるという面白い現象もあった。彼の他の作品を本八幡駅や亀戸駅前の映画館へよく観に行ったものだ。後年、私が最初に手に入れたDVDもこの作品である。

龍馬。福山雅治主演のNHK大河ドラマ“龍馬伝”は実に面白かった。福田靖原作で、司馬遼太郎の作品に比べて歯切れがよく、龍馬の人柄のよさと大胆さがよく表現されていた。昨夏、福山雅治が与那原の東浜（あがりはま）でコンサートを開いた。我が家の2階からカクテル光線が眺められ、遠くで音楽が響いていた。2日間で3万人の観客が集まったが、その内2万人は本土からの追っかけファンだったと聞いてびっくりした。

テンペスト。池上永一原作の小説と同名のNHKドラマである。女性主人公の“孫寧温”が琉球王朝末期に活躍する作品であるが、首里城正殿に刻まれた“竜”が彼女に乗り移るのである。琉球、薩摩、清国、西洋列強の国々が織りなす壮大なロマン劇である。文章表現がややオーバーで、史実と異なる点があるとの批判もあるが、エンターテイメントとしては面白い。ある日の喫茶店での隣のおばさん達の話。「私はねテンペストの筋そのものはどうでもいいの。テレビに出てくる一流の琉球衣装が気に入っているの。」とらえ方は様々だと気付かされた。

辰のいろいろを思いつくままに書き連ねたが、2012年が穏やかで平和な1年であることを切に願っている。



アナログな還暦

みさと耳鼻科
宮城 裕二

還暦を迎えて今年までの60年間を振り返り見た。戦後復興、バブル経済、不況、災害被害など多彩なことがあった。

その中でも特記すべき事項は、アナログからデジタルへの移行であろう。昭和はアナログ終焉時代、平成はデジタル躍進時代と位置づけられる。アナログ時代を支えたのは、第一次ベビーブーム後の世代。今年還暦を迎える昭和27年生の年齢層も「沖縄の団塊の世代」と呼ばれ、高度成長期の活気あるアナログ時代の一翼を担っていた。

投げ入れられた小石で水面に波紋が広がるように、東京を中心に文化、政治、経済情報が数年の遅れで沖縄に伝わった。このゆっくりとした時間の流れが、アナログのリズムだったのでしょう。昭和アナログ世代の私が今も楽しんでいるのが、家族で粗大ごみと評価の低い、ポリ

塩化ビニール製レコード盤である。レコードに帯電防止スプレーをかけ、丁寧にクリーナーで拭き、針をレコード盤の上にゆっくりと置く。この面倒な儀式を執り行うことで、プチプチノイズの中から始まる音楽に気持ちを高揚させていったのである。理論的にレコードの音は、CDより高音質ではあるが、最近のCDやデジタルの音は急速に進化しており、私の所有する高級アナログステレオ装置で奏でる音を、息子の安価なデジタル装置で再生できる。デジタル音楽の優位性は著明で、新譜はすべてデジタルでしか配給されていない。これまで大切に買い集めたレコードが、粗大ごみ化するの納得させられる。

もうひとつ楽しんでいるのにカメラがある。印画紙に浮かび上がる影に興奮した日光写真が、写真を始めるきっかけであった。

フィルムカメラはフィルムの残り枚数を気にして、1枚1枚大切に露出、速度、構図に気を配りシャッターを押す。現像に出した写真が手に戻るまでの数日間、傑作を期待しわくわくしながら待つ事も楽しみだった。満足する写真を得るため、時間、資金を費やし鍛えあげた写真技術だが、被写体にレンズを向けシャッターを押すだけのデジタルカメラでは不要。初心者にもそれなりの写真が簡単に撮れる。当然ベテランカメラマンにも恩恵はあり、フィルムカメラでは表現できない高度な特殊写真も写せるのは嬉しいが、素人との差が短縮するのは悔しい。近年、デジタルカメラしか売れないため、フィルムメーカー、カメラメーカーがアナログ製品から撤退してしまった。写真の世界もまさにデジタル全盛期。私の本棚にある高級フィルムカメラ5台も粗大ごみになりつつある。

平成デジタル世代は、アナログ世代の二世らが主役となる。私の若い勤務医時代は、病院から持たされたポケットベルに時代の最先端を感じていたが、いまや携帯電話が1人1台所有の時代。SF小説で夢であった超小型パソコンがそれである。デジタル時代の若者はその機能満載の携帯を自在に扱って、存分に楽しんでいる

る。まったく驚きである。デジタルの効用で、現代人は物資が豊富に溢れ便利で快適な生活を謳歌しているように見える。しかし、その豊かさに比例して、はたして私たちは幸福を感じているだろうか、いささか疑問である。社会の速い流れに巻き込まれ、疲労気味の現代人が田舎の風景や古い町並みなど、アンティークな古美術などに癒しを求めているのが現状である。これこそアナログへの回帰である。デジタル全盛の中で、消えつつあるアナログに郷愁を感じる還暦は、私だけで無いと思う。

今年は、災害のない平穏な年でありますよう、祈念。



県立名護病院勤務を振り返って

地方独立行政法人那覇市立病院
外科 山城 和也

新年おめでとうございます。私は昭和27年の辰年生まれです。干支に因んだ随筆をとのことですが、もうすぐ還暦という立場には何の感想もありませんので、若い頃お世話になった、今は無き名護病院のことを書いてみたいと思います。

皆さんは、県立名護病院をご存知ですか。平成3年12月1日に県立北部病院が新築・新生され、県立名護病院は建物も名称も消滅しました。過去に不祥事が二三あったので、まるで忌まわしいものが消し去られたような印象がありました。

私は昭和57年9月から名護病院に勤務しました。当時、名護病院は建物としては県立病院で一番古かったのですが、若く気鋭の医師が多かったと思います。内科・小児科・外科には中部病院で研修を受けた医師が多く、先進の心意気は高く、小児科では極小未熟児の治療、腸重積症のエコー下空気注腸整復など目を瞠るもの

がありました。内科の先生は気管切開、透析用シャントの作成などは自前で行っていました。しかし、脳神経外科、泌尿器科は診療科が無く緊急開頭術、尿管切石術、腎摘術などは外科医が行っていました。

外科スタッフは、トップは中部病院研修医一期生で厳しさと優しさを兼ね備えた何でもできるY先生、温厚で私と同郷の兄貴分のI先生、琉大よりの派遣医で飲むと性格が変わるK先生がいらっしゃいました。スタッフが少ないため待機手術は2人で行わざるを得ないなどの制限がありました。通常の勤務に負担感はありませんでした。しかし時間外と救急医療は大変でした。整形外科医1人を加えて5人で当直を行っていましたが、月に6回、土日は日当直で、21時間・24時間連続勤務、当直明けの休みはありませんでした。さらに月に1回は24時までの名護市医師会夜間診療所での勤務も任されました。

北部地域は、週末には中南部よりのツーリングで来た若者のバイク事故が多く、昼食をとる暇もないほど救急が忙しかった記憶があります。整形外科医は夜間、土日は不在の事が多く、ギプス固定やキルシュナー鋼線けん引などは自分で行っていました。

名護病院ならではの診療もありました。古宇利島や嘉陽部落などへの巡回診療、離島からの漁船による緊急搬送、真夏の公民館での乳がん検診、大京オープンゴルフの顧問医・・・名護病院は地域にとっても貢献していたと思います。

救急医療さえ忙しければ北部地域は素晴らしいところで、国頭の原生林、安田集落、屋我地湾や塩屋湾など、心が洗われる場所ばかりでした。結婚そして長女の誕生、星空の下でのビーチパーティーやみどり街での歓楽など楽しい思い出がいっぱいあります。

沖縄の医療はこの様なものだと思っていましたから、今思えば厳しい勤務にも耐えられたと思います。おかげで外科医師としての体力と気力はかなり鍛えられました。昭和61年より那覇市立病院に勤務しておりますが、私が名護病

院で経験してきたようなことは現在ではありえません。専門以外の診療を行うことは社会環境が許しませんし、手術でも助手としてしっかりとした経験が無ければ執刀も任せられません。

近年、外科医不足が言われていますが、施設を集約し専門化すれば、医師も充足し、時間外勤務の負担も減少すると思います。また、癌の症例は確実に増加してきていて、手術適応も増えています。腹腔鏡下手術などこれから発展が期待される分野もあり、外科医の将来は明るいと思います。外科は手術で病気を治癒させることが出来る診療科です。若手医師で将来何をするか悩んでいる方は、外科を専門とする事を一度ご考慮ください。



干支にちなんで

はえばる北クリニック
安里 千文

明けましておめでとうございます。はえばる北クリニックで内科を担当しております安里千文と申します。本年も（今後とも）どうぞ宜しくお願い申し上げます。

医師会会員登録早々に妙にタイミングよく干支がまわってきてしまい、つたない文章をお見せすることになってしまいました。しばしお付き合いください。

夫君の開業に伴いなんちゃって共同経営者となったのが今年の6月。開業後初めての新年、初めてのお正月です。とはいっても、この齢まで新年を迎えての目標を立てたことも特になく、改めて生まれ年を迎えての思いを・・・といわれましてもただただ困惑するだけです。

干支と言われて私が真っ先に思い出したのは、実家で使っていたお正月用の箸の袋です。大晦日になると母が家族それぞれの生まれ年の干支が付いた袋に入っている上等な箸を用意

てくれました。普段、自分の箸はあったはずなのに、正月に限って出てくるこの箸が妙にうれしかったことを思い出します。描いてある干支のデザインも何となくほのぼのとしておりました。最近自分でも探してもみたのですが、なかなか思っていたようなものは見つかりませんでした。

私の小さいころのお正月は、スーパーというもの自体がなく、八百屋さん、肉屋さん、お魚屋さんがそれぞれあった時代です。セリが休みの間はしっかり正月休みになる時代でしたから、おせち料理はただのごちそうとしてだけでなく、お正月の間の保存食としても重要でした。子供の私と妹の年末の手伝いは、塩漬けた数の子を水にもどした後の皮むきと茹でたギンナンの実で正月料理のお飾りを作る作業でした。数の子の皮むきは塩水の中に手を付けっぱなしで行うため手がかゆくなり、水を吸って手の皮が白くふやけてしまいました。それでも皮をむきながら取れてしまった数の子の切れ端を口に運びながらの手伝いで割と楽しかったことを覚えています。しかし、ギンナンには若干閉口しました。まず匂いが硫黄くさい、つまりおならくさかったこと。大人になった今でこそおいしく感じますが、子供時代にはさしておいしく感じないギンナンと格闘するのは大変でした。

お正月には必ず父親の職場の人が新年会と称してきていたことも懐かしく思い出されます。大学病院に勤めていた父親の医局の先生たちでしたが、当時、女医さんは少なく、当然集まるのはおじさんたちばかり。そういえばあまりお兄さんくらいの年代の人がいなかったのは、お正月の病院の当直をしていたんだらうなあ。とにかく、たくさんのおじさんたちがどっと来ては楽しく食べたり飲んだりされていったものです。酔っぱらったおじさんたちは子供だった私たち姉妹とよく遊んでくれました。が、時には酔っぱらいすぎて石油ストーブにぶつかり耐震装置を作動させたり（作動するとすぐに火は消されてしまい、次に着火するまでやや時間がかかり寒くなります。）ついでに向かいの教授宅

に向かって「おお〜い、〇〇！（教授の名前で）」と叫んで退場になる場面を子供心に楽しく拝見したものです。

現在同じように家庭を持って、同じように医師の夫を持ってはいるものの、あのころの母のようなお正月の準備のできない自分を省みて、自分の子供たちは干支やお正月のキーワードで何を思い出してくれるだろうか？と今回の投稿をきっかけにかなり不安になりました。

そうだ、今年は子供たちの思い出に残るお母さんをテーマに頑張ってみよう！と思いましたが、相変わらず帰宅は遅く、手作りの夕ご飯はおろかスーパーのお総菜がテーブルにのる日も少なくなき、どうしたものか・・・と思っているうちにまた来年になりそうな気がします。



うちの鬼嫁

今井内科医院
今井 千春

新年あけましておめでとうございます。中城村で内科医院を開業しています今井千春と申します。開業してからというもの、勤務医時代とは違って変わって時間をもて余しており、毎月送られてくる内科学会雑誌等も隅から隅まで眼を通すようになりました。県医師会雑誌の中では大勢の先生が執筆される新春干支随筆も楽しみの一つです。36歳、48歳、60歳、72歳、84歳の先生方の随筆は各年代ごとに特徴があります。仕事に燃える30代、今までを振り返りこれからの抱負を語る40代、まだまだ元気な60代、豊かな人生経験を語る70代、雲の上の存在？の80代と各世代で内容が異なり興味深いです。

この12干支の12年間隔というところが絶妙なところで自分の人生を振り返って見ると、12年後の自分の姿というものは全く予測できませ

んでした。24歳の研修医の自分は早く一人前の臨床医となることが大切で、12年後の自分に子供が二人いて外国で暮らしているとは想像できませんでした。次の年男の36歳では米国でネズミを相手に実験を行っていましたが、その12年後自分が開業しているとはこれまた予想だにしませんでした。果たして次の辰年の60歳、自分は何をしているのでしょうか？

60歳の自分を（予後）予測する上で、嫁さんの存在というものが非常に重要かと思われまます。米国で1921年から1,528人の10歳の男女を生涯に渡り追跡調査したThe Longevity Projectによると、一度結婚した男性が妻と別れると劇的に平均余命が悪化するそうです（ちなみに女性は夫と別れても全く予後には影響しないそうです）。

自分にとって30代の米国生活は楽しい思い出で一杯でしたが、体重が20kg増加した悲劇の時代でもありました。当時米国は食料品の値段はべらぼうに安く、ビールは日本の1/3の値段で思う存分飲みました。コカコーラは水代わりで、バケツくらいの容器に入ったハーゲンダッツアイスクリームもよく買いました。帰国後に健康診断を受けたところ、腹囲は増大し尿酸値が高くHDL-C値も低いことが判明しました。この結果に妻は驚愕し変わりました。大好きなビールは週5回に制限され、休止状態であった剣道も復活させられました。その甲斐もあり無事体重は元に戻りました。日常診療で独身男性の生活指導の困難さを経験するにつけ、しみじみと妻の強制力は偉大だと感じています。

開業後の現在も摂生の日々は続いています。朝は自宅から職場まで妻と一緒に歩いて通い、医院では看護師長兼事務長兼院長夫人として診察室の隣に鎮座しています。妻の機嫌を損ねると業務にも重大な支障をきたします。こちらが何か口答えしようものなら「もう、医院に行かないよ」と恫喝します。妻の持つ横のネットワークも強大で太刀打ちできません。妻はいかに自分が働き者かを力説します。朝は5時半に起きて4人分の弁当を作り、卸業者からはタフネ

ゴシエーターと恐れられている姿を見ると、それはもっともなのかなと思えてきます。

それでは最後に最近妻が仕入れてきた家庭円満の三つの秘訣をご紹介します。新年の随筆を終えたいと思います。この秘訣の効果につきましては、60歳での新春干支随筆で結果をご報告したいと思います。それでは今年もよろしくお願いたします。

- #1 妻にお願いされたら間髪を入れず「はい」
- #2 妻が嬉しそうに話している時は、内容を聞いていなくても大きく頷き「へえ〜」
- #3 妻に文句を言われたら、例えそれが理不尽で納得できなくても「わかりました」



辰年に因んで

豊見城中央病院 循環器内科
嘉数 真教

会員の先生方、新年明けましておめでとうございます。

医者になって20年、豊見城中央病院の循環器内科に就職してはや8年となり、今年48歳の年男となったようです。この原稿の依頼が来るまでは気づきませんでした。

確か、36歳の年男時にはちょうど自治医大の義務年限が終了し、県立中部病院から中部徳洲会病院へと移った年であったと思います。公務員をやめることに関して、周辺親族からは大分反対の声もあったのを覚えています。

更にさかのぼって、24歳のころを思い出してみました。この時は、大学5年次であり、自治医大ラグビー部の幹部の一員として東医体5連覇を達成し、そろそろ国家試験に向けての勉強を誓った正月だったと思います。同時に、県人会のトップに立ち、後輩達の追試の手助けや激励、悩み相談などを受けていた頃でもあった

ような気がします。

12歳時は、皆さんと同じように小学校6年生でした。その頃のクラスの文集が残っていたので読んでみました。そのなかに、「ただ今の希望〜さて20年後は?」というページがあり、将来なりたい職業をひとりひとり直筆で書かれてありました。「大きな店を持ちたい」「オリンピック選手になりたい」「夜明けの刑事にでていい役をしたい」などいろいろな夢が書かれていました。その中で「しょうらいはうんにまかせよう」というのがあって、名前をみてもそれが私でした。「何という夢だ、しかもひらがなで」と、情けない気持ちになってしまいました。

自分では気づきませんでしたが、あまり夢を持たないタイプなのかもしれません。

さて、私たちの年代、1964年生は甲辰（きのえたつ）生まれですが、運勢や算命学などをみてみますと、「甲辰の生まれは激しい質を秘める」「何かに向かうと猪突猛進します」「男性の場合、困難を乗り越え成功しますが、強い性格故、敵味方が多く、女性の場合は仕事と家庭の両立は難しいでしょう」など、おおよそ「辰」とちがう干支のイメージのことが多く書かれていました。

「竜」「龍」と考えるならそうかもしれませんが、私のなかでの「辰」は「タツノオトシゴ（辰の落とし子）」であり、魚なのか甲殻類なのかわからないとぼけた生き物です。時に、漢方薬コーナーや水族館ではみかけたりはしますが、実際には海中では一度もお目にかかったことがない生物です。

しかし、実際に書かれていることに関してはうちあたりする部分も多々あります。みかけはとぼけていても、内には激しい競争心・強さを備えていると解釈すれば、「タツノオトシゴ」もいざというときには「龍」と変わりうるということ。いや、きっとそうでしょう。

今年は、一つの節目として「タツ」を意識しながらやってみようと思います。時には激しく、時にはおとなしく、そしてまわりの人々の生葉になるように。

新年から、とりとめもない文章を読んでいただきましてありがとうございます。
今年もよろしく願いいたします。



“気概”

嶺井第一病院
川上 憲章

年男ということで今回寄稿の機会を与えて頂いた。

自分は福岡生まれの山口育ち、医局人事ではあるがこの地で働いている昭和39年生まれの脳外科医である。昭和39年といえば、東京オリンピック開催、東海道新幹線開通など我が国にとってビッグイベントが多々あった年であり、この前後に生まれた世代は高度経済成長の波にのりぬくぬくと育ち、“新人類”と呼ばれたこともある。ただし、その一方でまだ“根性”“我慢”“忍耐”などの泥臭い言葉も抵抗なく受け入れられる世代だと思っている。加えて自分の父親、祖父ともに福岡の、紛うこと無き九州男児であり子供の頃からその辺りは厳しく躰けられた（まあ新人類なので“そんな根性要りません”と心の中でささやかな反抗をした記憶はあるが）。

そんな自分も今年で恐ろしいことに48歳になる。人生50年としたらもう終わりが近いが、これまでの自分を総合評価、自己採点すると60点というところか。世間様から後ろ指を指されないようにやってきはしたが、物足りなさを覚える事は二つ三つでは収まらない。

仕事や人生面での志はあるが気概が足りない。“一心不乱”とか“命を賭して”までの気概がなかったと感じる。人の命を預かる責任ある立場にあり、プライドを持ってしっかりやってきたつもりだ。しかしそれとは違うもの、それでも足りないものが“気概”だ。まだまだ甘

っちょろいなとつくづく思う。

話はそれるが、自分が育った山口県＝長州の名産の一つに総理大臣がある。明治維新以降、最近では安倍晋三氏や菅直人氏（高校までは山口県で育ち僕の高校の先輩だ）と世間の評価は？の方を入れ9名である。県民性は“薩摩の大提灯、長州の小提灯”と言われ、先頭の人に従う薩摩人に対し、長州人は一人ずつ単独で動き、自己顕示欲や上昇志向が強く、理屈家で論争好きとされ、政治好きも多い。笑い話だが、自分が5歳の頃“何になりたいの？”と大人に聞かれたことがある。当時なりたいたいものなどもなく答えに窮したが、とっさに無難な答えを思いつき、それからはいつもこう答えていた。“総理大臣”と。別に政治とは無関係な家の子だが（祖父が福岡の田舎の町長になろうとしたくらいで、それも道半ば病に倒れた）、周りの大人も笑って見守ってくれたことだろう。それ程までに政治や、明治維新を身近に感じる所なのである。

明治維新とくれば吉田松陰である。松下村塾（表現は悪いが天井の低い小さな掘立小屋です）には興味が無くとも何回か行っている（今の政界には似たような名前の松下〇〇塾の方が多いが、その不甲斐なさに幸〇助さんも泣いているでしょう）。子供の頃はただ、年上のおじさんたちが凄いことをしたのだ、としか思っていなかった。だが本当は彼らは皆若く、吉田松陰（享年30）、久坂玄瑞（享年25）、高杉晋作（享年29）など夢半ばに亡くなっている。しばし自分を彼らに重ね合わせると、時代があまりにも違いすぎるとはいえ、彼らよりも馬齢を重ねてしまった今、自分の志の低さ、気概のなさに情けない気持ちになる。こんなことじゃあいかん！

さて今年も年男ということもあり、なんとか確固たる志とそれを成し遂げる気概を持てるようにならねばと覚悟する。新人类的には、今年駄目なら次の年男の時にでも…、となりそうだがその時は60歳になってしまい、それどころではないかもしれない。うかうかはしてられないのである。



辰年を迎えて

(医) 安立医院
小林 竜司

新年明けましておめでとうございます。今年が年男ということで沖縄県医師会から新春干支随筆の依頼がありました。近況や仕事の話について書いていきたいと思っています。

私は平成3年3月に自治医科大学を卒業後、県立中部病院で2年間の初期研修を受け、離島の診療所、県立中部病院に勤務しました。中部病院時代に腎臓内科を専攻し、腎臓病、糖尿病、膠原病を学びました。そして日本腎臓学会専門医、日本透析医学会専門医を修得しました。

平成15年5月に現在の職場である安立医院へ赴任しました。クリニックで人工透析を中心とした医療を行いたいと思ったからです。安立医院は沖縄県の中部地区、沖縄市山内にあり、入院19床、透析57床です。外来、入院患者さんを合わせて約160名（平成23年10月現在）の患者が人工透析を受けています。個人のクリニックとしては大規模な施設です。私の仕事は透析外来の回診が主ですが、その他、入院患者の回診、一般外来の診察などあり結構忙しいです。

外来の診療は腎臓病、高血圧、高脂血症、糖尿病の他に膠原病の患者さんも診ています。膠原病はリウマチやSLEの患者さんが主です。少人数ですがリウマチの患者さんに生物学的製剤を使用しています。

透析外来では午前の透析患者さんが55名前後、夜間が25名前後で1日約80名の患者さんを診察します。高齢化により重症の患者さんが増えているように思います。合併症としてはシャント不全、心不全、電解質異常（高カリウム血症など）、脳卒中、消化管出血、感染症などがみられます。最近の傾向として虚血性心疾患や弁膜症、不整脈などの循環器疾患が増加し、心臓カテーテル検査を受ける患者さんが増加し

ています。

次に透析医療に関わっていて、医療の進歩を感じたことを幾つか書きたいと思っています。

まず高血圧の治療に関してですが、昔は5～6剤併用しても患者さんの血圧が下がらなくて頭を抱えていました。最近ではアンギオテンシン受容体拮抗薬や長期作用型のカルシウム拮抗薬など強力な降圧剤が出て、2～3剤併用程度で血圧のコントロールが可能となっています。

腎性貧血の治療では、週3回投与のエリスロポエチン製剤が主流でした。最近、週1回投与のダルベポエチン、月1回投与のエポエチンベータなどが市販されました。使用してみると長期作用型が使い易く感じます。エリスロポエチン製剤は包括化されていることもあり、貧血のコントロールは重要です。今後、使用方法を研究していきたいと思っています。

長期間透析を受けていると副甲状腺機ホルモンの上昇がみられ、二次性副甲状腺機能亢進症を発症します。最終的には副甲状腺切除術が必要となり、手術を嫌がる患者さんが多く困っていました。治療としてはビタミンD製剤の静注や内服が主流でしたが、2年ほど前にシネカルセトという内服薬が市販されました。副甲状腺のカルシウム受容体に直接作用する薬です。当初は内服薬では全く効果がないのではないかと考えていました。しかし投薬してみると副甲状腺ホルモンの値が劇的に下がります。当院では副甲状腺切除術を受ける患者さんが年間10例近くいましたが、この薬を投与してから、ほとんどいなくなりました。最近、最も驚かされた薬です。

医療は日々進歩していて幾つになっても勉強していかなければならないと思っています。早いもので今年4度目の干支を迎えます。正直な所、日々の仕事で忙しく今まで年齢や干支など自分では考えたこともありませんでした。いつまでも気持ちだけは若いつもりですが、最近では体力の衰えを感じます。次の干支までの間、健康には十分に注意して頑張っていきたいと思っています。



事故の記憶

さむら脳神経クリニック
佐村 博史

あれは忘れもしない今から14年前、1998年元旦のことです。

年明け直前に脳出血の急患が入って、私は1998年の始まりを八重山病院の手術室で迎えたのでした。手術が終わって帰宅する時はたいしたことなかったんですが、夜半過ぎから降り出した雨は激しさを増し、夜が明けてからも土砂降りの年明けでした。朝食の時病院から、「救急室が大変なことになっている。すぐ来い！」と電話が入りました。飛んで行くと救急室は血の海。

夜中に浜辺で酒盛りをした高校生7人のグループが、パジェロに乗って帰り道でクラッシュし、超重症交通外傷が5人いっぺんに搬送されてきたのです。5人とも超重症頭部外傷で、全て脳外科医が対応しなければなりません。

他の地域であれば、別々の病院に搬送されたかもしれませんし、救急患者のたらい回しが言われるご時世ですから、受け入れ出来ませんってコトもあったかもしれませんが、当時の石垣市に、いや、八重山郡に病院は八重山病院ただ一つ。救急車のピーポーピーポーが聞こえれば、必ず八重山病院に搬送されてきます。

勿論「受け入れ出来ません」などとお断りすることなど、びた一文出来ない状況です。救急室の初期対応では、小児科、産婦人科、外科、整形外科など医局の先生方が総出で手伝ってくださり、何とか乗り切ることが出来たのです。

運転席と助手席の2人は軽傷ですんだのですが、後部座席に乗っていた4人のうち2人はほぼ即死。残り2人も助かりませんでした。トラックで寝ていた最後の1人は、3ヶ月間は意識のない状態が続きましたが、何とか意識も回復し装具や杖などを使ってどうにか歩けるくらい

までに回復しました。

年の初めから書くべき内容ではないかもしれませんが、これは14年前の元旦に実際に起こった出来事です。私は4人目の患者さんが亡くなるまでの3週間余の期間、ご家族と脳死の現場を一緒に戦いました。私にとって絶対忘れない出来事ですし、このような悲惨な事故が二度と、いや絶対に起こってはならないと思います。

時間が経てば事故の記憶は薄れ風化していくかもしれませんが、亡くなった子供達のご家族にはいつまでも消せない悲しい記憶として残っているはずですし、それはあの事故で犠牲になった子供達を受け持った私も同じです。忘れようと思っても忘れることは出来ません。

毎年元旦には、事故で亡くなった子供達のご冥福をお祈りします。高校生って、なりはでかくてもまだまだ子供です。計り知れない可能性を秘めた未来ある若者達が、若さ故の無謀な過ちや暴走行為で大切な命を無駄に落とすことの無いよう願わずにはられません。

今年1年、みんなが健康で過ごせますように！
悲惨な事故が、二度と起きませんように！！！！



辰年に因んで

おもろまちメディカルセンター
泌尿器科 城間 和郎

今年は辰年です。私も今年で5回目の年男となりました。そこで今回は過去の年男を順番に振り返ってみたいと思います。

《1回目の年男(0歳 昭和39年、1964年)》

私は昭和39年8月8日に那覇市壺屋の赤嶺産婦人科医院で生まれました。この年は東京オリンピックの年で、東海道新幹線開通や東京モノレールの開通など歴史的イベントの多い年で

維持、波風が立たない人生を望む潜在意識がなせるものかもしれません。というところで今年の抱負を。昨年に始まった減量プロジェクトもいよいよ大詰め、一ヶ月に約1Kgペースで減量に励んだ結果、ようやく12kgの減量に至りました。一時は、寺田は悪い病気なのでは？という疑惑まで浮上しましたが、目標まで残すはあと3Kgとなり現在は少し停滞中です。リバウンドという結果に終わらないように、なんとか今年中の達成を第一の抱負としたいと考えています。第二の抱負としては休みに息子と遊ぶこと。例に違わず平日は息子が起きる前に仕事に出て、帰宅時には既に寝ている状態。そろそろ息子に忘れられてしまう黄色信号が点灯中なので、休みの日はなんとか一緒に遊んであげたい思うのですが、土日もなぜかいろいろな用事が・・・頑張らねば。そして最後の抱負はガーデニング。構想から2年の歳月を経て昨年5月によりややく新居が完成し引っ越しました。昨年はNHKの趣味の園芸や野菜の時間を参考にオクラ、二十日ネギなどを庭で作りました。自宅の庭でとれた野菜は息子にも思いのほか好評で、これで野菜嫌いが治ってくればと淡い期待も抱きつつ、現在は人参、タマネギ、ジャガイモを栽培中です。それはそうとNHKの園芸関係の番組は西城秀樹さん、榊原郁恵さんなどが出演していたり結構楽しめます。また同じ園芸系の番組でも花の栽培の方はイケメンのガーデナーさんが出ていたりして、これはこれでNHKなかなかやるなど感心させられます。というところで出そろった抱負は何とも小さい抱負という結果になり自分ながらにあきれていますが・・・それはそうといった仕事の抱負はないのかと突っ込みの声が聞こえてきそうですが、今回はあえて披露しないでおきたいと思えます。果たして、やりたいことが多すぎて抱負を一つに絞れなかったのか、はたまたいつも目の前のやるべきことがこなせず四苦八苦している間に一年が過ぎてしまい抱負を考える余裕もなかったのか、その辺の所は皆さんのご想像にお任せいたします。皆さんに幸多き年となるこ

とを願いつつ、新年の挨拶にかえさせていただきます。



今年の抱負

琉球大学医学部感染症・呼吸器・
消化器内科学(第一内科) 比嘉 太

皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は未曾有の大震災があり、日本中が悲しみと不安に揺れた大変な一年でありました。年が明け、被災された方々には一日も早く安寧の日々が訪れることを願っております。

さて、私は辰年生まれということで、県医師会報で新年のご挨拶をする機会を頂きました。日頃のんびり過ごしている私をご指名頂いたということは、自分自身の来し方行く末ぐらいいちやんと考えなさいという暖かい御指導であるようにも感じられ、改めて感謝を申し上げたいと思います。

思い起こせば、三十年前私は設立されたばかりの琉球大学医学部に二期生として入学しました。琉球大学医学部の理念は「南に開かれた医学部」であり、当時の大鶴医学部長と小張病院長の薫陶を直接に授かり、旧くて新しい分野である感染症学に眼を開かせて頂きました。学生時代のインパクトは極めて大きかったと思います。多くの琉大の同窓生が感染症の基礎や臨床

に携わり、日本全国で活躍されています。私はその中の一人というには大した仕事もしていないのですが、現在も琉球大学病院で勤務し、呼吸器や感染症の患者さんの診療に携わるとともに、病院全体の感染対策業務を担当する感染対策室に所属し、日々感染症対策に関わっております。

感染制御学というのは比較的新しい学問分野で、病院内外での感染症を減らすことを目標として、そのためのエビデンスを構築する学問といえます。感染症の予防学というところでしょうか。医科学というよりも、社会学、教育学、経営学、環境学、という様々な立場がからまっている分野です。琉大病院の感染対策室には、感染制御看護師ICN、感染制御医ICD、薬剤師、臨床検査技師、事務部担当者、が所属して、組織横断的な活動を行っています。様々な職種が協力して仕事をする楽しさもありますが、感染対策は「言うは易し行は難し」を実感するところでもあります。最近、「おいあくま」というのが盗塁王福本豊さんの言葉として新聞で紹介されていました。「おこるな、いばるな、あせるな、くさるな、まけるな」。この言葉を胸に盗塁数日本一を達成されたそうです。なるほど、感染制御に携わる者にも全くあてはまる言葉だと思っております。

これまでの来し方を振り返ってみると、本当に多くの方々にご指導を賜ってきました。皆様の御恩に対して少しでも報いるように、「初心に還って」もうひと頑張りせねばという気持ちです。辰年生まれでも「龍」にはなれそうもありませんが、月並みなことばですが、私なりの精一杯の社会貢献に努めて参りたいと思います。



辰年に因んで

平安病院
平安 明

年男なんてこれまでさほど意識したことはなかった。今回の依頼をきっかけに生まれ年とか人生の節目といったことを少々考えてみようかと思う。

昭和39年というと象徴的なのは東京オリンピックの開催であろうか。敗戦国からの国際社会への復興の象徴として日本中が湧き上がったとのことであるが、当然私は生まれたての赤ん坊で実感としては何も残っていない。日本は昭和30年代後半～40年代と経済発展著しい高度成長期に入り、それ行けやれ行けといった時代に突入する。政治、経済、人々のライフスタイル、様々な価値観の衝突、等々いろんなことがハイポテンシャルに営まれた時代であったと思う。そんな中、私たちの世代の多くは何となくぬくぬくと安定した環境の中を過ごしてきたように思う。(勿論人それぞれなので異論のある方も多いでしょうが一人のS39年生の戯言として受け流してください)

「安心」と「安全」が当たり前のようにある社会、みんなが支え合って豊かな老後を生きていけるような社会に、と多くの人が一生懸命頑張ってきた時代を、私は若干当事者性を欠いた立ち位置で他人事のように眺めながら人生の最初の四半期を生きてきたような気がする。こんな腑抜けた状態から抜け出したのは医者になってからであろうか。医学生時代は兎に角デタラメな生活で「こんなモチベーションの人間が医者になってはいかん」と自分で屁理屈をいっては朝まで酒を飲みながらわけのわからない議論を見ず知らずの人と交わしているという日々であった。そんな時期が無意味とは言わないが、大きな無駄を伴う貴重な体力の消耗であったことは否めない。

辛うじて脳がまだ若かったせいか、国家試験は馬力でクリアし久留米大学の第二外科に入局した。昨年還暦を迎えた北部地区医師会の名嘉真透先生のお勧めであった。(名嘉真先生とは久留米大学の学生の頃から県人会の場で何度かへべれけになるまでお酒を飲ませていただいたご縁があった。---これ以上の詳しいことは言えない)

名嘉真先生の恩師中山陽城先生は私が入局した時には既に胃癌のため他界されていたが、その遺志を受けついで素晴らしい諸先輩方に恵まれ、充実した研修医時代を送らせていただいた。この時期に、人として、社会人として、医師として、仲間として、男として、どうあるべきか、みたいなことを教えられたように思う。未だ殆ど実践できていないが---

当初から予定していた通り、平成6年には精神科医になるべく琉球大学精神神経科に研究生として入局した。沖縄に帰る当日まで術後ICUで受け持ち重症患者の血漿交換をしており、飛行機に間に合うギリギリの時間まで病院に残り後ろ髪を引かれる思いでの帰沖となったが、同じ徹夜組の同僚や後輩が久留米から福岡空港まで見送りにきてくれたのは今でも貴重な財産となって胸に残っている。

琉大で精神科医として研修後、平成9年からは病院の経営を引き継ぎ理事長職に就くことになった。36歳の年男の時であった。

あれから干支が一回りした。この間医療界は激動の時期を迎え、政治も経済も人々の関係性を含めた社会構造も、高度成長やバブルのつけとも言えるがんじがらめの状況に陥っている。この厳しさはあの時代ぬくぬくと過ごしてきた自分たちが背負っていかなければならないことかも知れないと思い、先輩たちの苦勞ほどではないが、次世代に新しい形で再生できるようにバトンを渡していくことが私たちの世代に与えられた課題だと考えている。

最後になるが、去年は大災害の年であった。千年に一度という戦争世代ですら味わっていないとてつもない大災害である。多くの方が犠牲

になった。何度お悔やみをいっても足りない。図らずも私たちは世代や価値観を超えてこの重大な局面を乗り越えていかねばならなくなった。

地震、津波だけでなく、原発の問題が足を引っ張り、本当に先の見えにくい厳しい状況であるが、もう一巡干支が回り還暦を迎える頃には、震災を乗り越え新しい日本のあり方を皆が語れるようになって欲しい。そのために何ができるのか人生後半の自分自身の課題にしようと思っている。



トンデモ本の世界から

医療法人ほくと会 北部病院
宮城 一文

あけましておめでとうございます。

およそ、ひと干支前から「トンデモ本の世界」(と学会編、洋泉社など)シリーズを愛読しています。UFOや心霊現象などいわゆる“まっとうな科学”では取り上げられない仮説や主張の本をおもしろおかしく読んでいこう、というスタンスの本ですが、仮説の元になった事実の確認や、実験の検討など、なかなか“科学的(合理的)”であります。シリーズはすでに二、三十冊ほど出版されておりますが、まとまった情報としては「トンデモ超常現象99の真相」(と学会編、宝島社文庫)がおすすめです。子供や孫、甥や姪に「ネッシー」や「雪男」、「エリア51に墜落した異星人の空飛ぶ円盤」、「魂の体外離脱体験」などについて質問されても、自信を持って答えることが出来るはず(夢は壊してしましますが)。

しかし中には笑い事では済まないトンデモない仮説が見受けられます。特に健康、医療については、現代医学を敵視して、医療機関への受診を控えるよう主張するものも珍しくありません。比較検討のない著効報告と一方的な思いこ

みの推論から組み立てられた怪しい仮説は「現代医学」の合理性とは相容れられません。そのような「トンデモ説」を信じてしまうと、結果として健康被害を生じてしまうこともあります。さらには社会を指導、啓発する立場の人が反科学的な仮説にはまってしまいますと、当の本人だけの問題でなく、多くの人たちに多大な苦しみと負担をかけてしまいます。「エイズを弄ぶ人々」(セス・C・カリッチマン著、科学同人)では南アフリカ共和国で起きた悲劇を取り上げています。当時のムベキ大統領、マント保健大臣がエイズの原因を「貧困から生じる栄養障害による免疫力低下」と信じ、「エイズウイルス原因説は欧米がアフリカに押しつけた陰謀」と判断したことにより、国内での抗レトロウイルス薬の普及を阻害しました。その結果、南アフリカ共和国では、エイズの感染率、死亡率ともに抑えることはできませんでした。

南アフリカ共和国のエイズ政策の過誤は極端な例ですが、医療関係者だけでなく、社会一般が科学的な知識を共有し、合理的な判断を心がけないと、そのむくいは国民に返ってきます。副作用のない薬が存在しないことは、医療従事者であればみんな知っています。しかし、その「常識」さえ世間では一般的ではありません。医療の安全に100%はありえません。「安全」を過大に重視すれば、医療は成り立ちません。良い医療には合理的な「メリット」と「害」のバランスが必要です。このことは世間に理解してもらえる必要があります。その点から県医師会が定期的に行っているマスコミとの懇親会はとても良い企画です。回が進むごとにマスコミ関係者の医療への理解が深まっているのがよくわかります。ぜひ、今後も続けて欲しいと思います。

世間一般に影響力の大きいメディアは、今はまだまだマスメディアです。医学の常識は科学的考え方を基にしており、マスコミの医療に対する理解が深まれば、それは医療の分野にとどまらず、合理的思考を養い、科学的知識を基に、世界を見る視点にも、また考え方にも影響

を与えるでしょう。マスコミの成熟は世間への啓発につながる。

と考えました。



48歳で習慣について語る

ハートライフ病院 外科

宮平 工

48歳である。なんと立派な年齢になってしまったことか。

数年前より、サラリーマン向けの自己啓発本なるジャンルが気になって仕方がない。空港の本屋で1~2冊買っては出張の度に読んでみる。時間管理術や対人関係、手帳術、整理整頓からセルフコントロールまで、そのテーマは多岐にわたる。大体において、これらの本は人生における成功を収めることを目標としていると考えられるが、何が成功かは別として、私なりに学んだことを著したい。

これらのテーマを克服したり、体得するためには、継続することが大事である。スポーツと同じで繰り返しトレーニングすることで技は磨かれ、その反面トレーニングを怠ると衰える。結果、習慣化されればしめたものである。

100冊は下らないであろう自己啓発本読破の末にたどりついた結論は習慣化が最も大事であるということである。当方遅ればせながらこんな大事なことにようやく気がついた。もっと早く気付いていればと今更後悔する訳でもないが、特に若い諸君には強く認識していただきたい。大事ですよ、習慣とは。ここで、習慣に関する名言をふたつ。習慣は第二の天性である(聖アウグスチヌス)。心が変われば態度が変わる。態度が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。運命が変われば人生が変わる(蓮沼文三)。で、私の一押

しは即実行の習慣である。ちょっとしたことが、効果絶大と自負している。

さて、継続するためのコツとしてはモチベーションを高めるとかアメ（ご褒美）を設定するとか同士をつくるなどがあるが、私のおすすめはレコーディングダイエットならぬレコーディング習慣化である。ジョギングを例にとると、10分間走を1ポイントとして、走ったポイントをカレンダーもしくは手帳に記録（レコーディング）する。ポイントが増えるとうれしいし、少ない月はもう少し走ろうかと思うようになる。

ということで、40代なかばから時間管理術や手帳術を駆使して時間をつくっては少しずつ走り始め、最近ではハーフマラソン、フルマラソンにエントリーし、5戦全勝である。元来肥満ではないが、少しダイエットをして、尿酸が正常化し、禁煙も成功させた。良い習慣を増やして、悪い習慣を駆逐する。これからは瞑想とか哲学などに挑んでみようかと思っている。


12年後は人生について語ることが出来るようになればと願う。年齢だけ立派にならず、中身も伴ってほしいと願う。

最後に詩をひとつ紹介します。

習慣

私はいつもあなたのそばにいる
いちばん頼りになる助け手でもあれば、大変な厄介者でもある
後押しもすれば、足を引っ張ってしくじらせもする
私はあなたの命令次第
半分だけやって任せてくれれば、
私は残りは手早く正確に片付けてしまう
私の扱いは簡単
念押しは不要
何をしたいかを見せてくれれば、少しの練習であとは自動的だ
私はすべての偉大な人物の僕
そして何たることか、すべてのしくじりの主人
偉大な人が偉大になったのは私のため
しくじった人がしくじったのも私のため

私は機械ではないが、機械のような正確さと人の知性によって動く
私を動かして利益を得ることもできれば、破滅を招くこともできる
私にはそれは関係ない
私を利用して訓練し、しっかりと働かせなさい
そうすればこの世を足もとに従えることさえできる
しかし、甘やかせばあなたを滅ぼす
私はだれか
私は習慣
作者不詳
出典：人生を築く時間の刻み方 ハイラム・W・スミス著 産能大学出版社



新年にあたって

ほくと会北部病院
宮城 清美

新年あけましておめでとうございます。いつもお世話になっております。今年がみなさまにとっても良い年でありますようお祈りいたします。

今年のお正月は、被災地ではどう迎えられているかが気になります。去年の震災は、いったいどうだったのか、津波災害について、琉大工学部の先生の講演を聞く機会がありました。

東北は災害対策の先進県で、津波対策はすでにとられていたそうです。ところが、避難所において津波にあったケースと避難所からすぐに避難して難を逃れたケースがあったそうです。

「大切なことはリスクマネジメントということです。リスクマネジメントは危機管理と訳されることがありますが、危機のときどうするかではありません」と講演で言っていました。

リスクの定義は、英語のriskと完全に同じではありません。危険という意味に加えてその確率と度合いという意味がふくまれます。このた

め、自動車事故のリスクといった場合は、自動車運転による危険の確率と程度をあらわすことになります。これは、危険をどれぐらいの確率でどのくらい危ないかの2方向から考慮するという事です。するとリスクの確率と程度を評価したあとリスクを処理することができるというのが、リスクマネジメントの考えかたです。この理論と統計を用いて、自動車保険や交通ルールがつくられています。

津波は、リスクとしての確率は低いのですが、いったんおきると甚大な被害が発生します。リスク対応として、防波堤をつくり、避難所をつくり、防災訓練を行います。しかし、たとえ完璧と思える津波対策をしても、絶対安全はありえないということに、理解が必要です。またリスク対策をとらないことによってリスクが生じる場合があるということも理解が必要です。防災訓練というのは、どういう経路で避難するかという個別の知識なので、状況が変わると適応できないことがあります。リスクマネジメントの考え方をすることでリスク対応の行動が変わるかもしれません。講演を聞いて、リスクマネジメントの概念は重要だと思いました。

震災は自分にとって、大きなことを教えてくれたように思います。まだまだ時間がかかると思いますが、被災地の1日も早い復興を期待したいと思います。



高校同窓会幹事

みはら整形外科耳鼻科
諸見里 浩

昨年、私は、卒後30年目の高校同窓会幹事をやることになり、自分もそんな歳になったんだと実感しました。自分の長女と同じ歳の頃の集まりで、皆でバカな事ばかりやっていたのを思い出し、何だかとても不思議な気持ちになり

ました。

私は今回、同窓会の案内状を連絡のほとんどがネットやメールのこのご時世に、あえてレトロな手紙にしました。メールは早くて便利ですが、何となく自分の気持ちが伝わらない気がしたからです。以下がその文面で、ビーチで拾ってきたサンゴと綺麗な昼下がりの海の写真を同封して送りました。

皆さんお元気ですか？

今年の同窓会の日程が決まりましたので、お知らせします。

大震災や原発事故が起こり、今年の同窓会は中止にしようかと思いました。

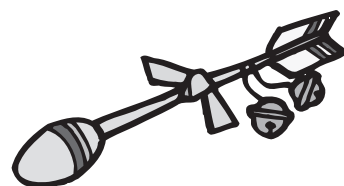
でも、こんな時だからこそ30年ぶりに皆で集まり、元気を確かめ、楽しくやりませんか！

一人でも多くの方の参加を願っています。是非、ご参加ください。

初めは、幹事として、参加してくれる人数が気になってしまいました。しかし、送られてくる出欠の連絡と共に書き込まれたコメントを読んでいるうちに、30年を経てもみんなが自分のことを憶えていてくれた事への喜びや懐かしさ、そして一瞬にして当時の自分達へ戻れる同級生の不思議な力を感じ、とても嬉しくなりました。

同窓会幹事なんて、大変で面倒くさそうだなあ！こう、真っ先に思いました。しかし今は、参加できない人の事情を含め、みんなの近況を知る事ができ、加えて自分の存在を再確認できたと今回の経験に感謝しています。

“30年後の幹事も頑張ります！”



通過地点・今年の抱負

琉球大学亜熱帯島嶼科学超域
研究推進機構 石川 千恵

新春のご挨拶を申し上げます。琉球大学亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構の石川です。2001年に琉球大学を卒業後、小児科医として4年間臨床に没頭しました。2005年に大学院に進学し、基礎研究を始めてもうすぐ8年目になります。現在は発がんウイルスをテーマとして細胞株や実験動物に遊ばれながら基礎研究を行っています。また、小児科診療もパートタイムの形で継続しています。研究においては年1報の研究報告ができるように、診療においては事故がないように、今年も精進したいと思います。

さて、私は辰年生まれで今年36歳になります。辰（龍）は十二支の中で唯一架空の動物です。十二支の順番はお釈迦様のもとに新年の挨拶に来た順番ともいわれていますが、自在に天空を飛翔するとされる龍がどうして兎より遅かったのかは不思議です。意外に遠慮深くて、神殿に入るのを躊躇していたのかもしれませんが。私も年始回りの際にはそのような経験をします。

ところで、龍は伝説上の動物ですが、人類が実際に作った便利なもののひとつにコンピュータがあります。私自身、前々回の辰年の頃はMSXというPCで、Basicという言語を使ってプログラミングしていました。プログラミングといっても、学校の時間割を作ったり（現在のExcel風）、背景の怪しいピンポンゲームを作ったぐらいです。その頃はプログラムの保存にカセットテープを使用していました。プログラムを保存するときはテープをデッキにセットし録音モードとします。PCをsaveモードにすると、電子音が出てプログラム情報が保存されます。保存したプログラムを開くときはPCをloadモードにしてテープを再生するのですが、保存が悪いのか機械が悪いのか半分近くは復元が叶わず、

結局自分自身の記憶が一番安定した記憶媒体でした。その後、DOS、Windows3.x・95・Meと変転し、現在はXPとMac OS Xを使用しています。昔に比べるとPCは使いやすく便利になったものと改めて感じます。前回の辰年はY2K問題に翻弄されましたが、今後さらなる技術革新により西暦3000年や10000年の年末年始は問題なく過ごせることと期待しています。

一方で、人類が与えられた便利なものに放射線があります。現段階で安全面も含めた原子力の是非は判断できませんが、エネルギーとしては相当なものです。また、放射線は医療現場でも重要ですし、私自身も放射性物質を使用した実験を行っています。日本の原子力産業は国を挙げて推進したこともあり、発電所の数は世界第3位で、発電量の約30%を原子力発電に頼っています（した）。震災がきっかけであったとはいえ、国民全体が原子力に対して真剣に向き合う機会が与えられたのではないかと考えています。およそ世の事物につきその極度の一方のみを論ずれば弊害あらざるものなし。最終的に原子力を手放すという選択は当然あるとしても、原子力という諸刃の剣をいかに使用してきたか、次世代のためにどう扱うべきなのか、冷静な話し合いが必要だと思います。

さてさて、今年は17世紀にケプラーが予測して以来8回目の金星の日面通過があります。プライベートにおける今年の抱負は、金星日面通過の観察とそのため太陽望遠鏡の購入費の捻出です。星は動き、世界は息つく暇もなく変化しています。予測不可能な人生ですが、私もまだまだ通過地点。今年もどうにか生きていこ



うと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えて頂き、金谷文則先生はじめ沖縄県医師会広報委員の先生方に厚くお礼申し上げます。



新春干支随筆

琉球大学医学部附属病院
第3内科 國場 和仁

みなさん、新年明けましておめでとうございます。このたび、広報委員の金谷文則先生からのご推薦を賜り不肖ながら筆を執らせて頂くこととなりました國場和仁と申します。

所属は琉球大学医学部附属病院第3内科で神経グループです。現在、脳卒中診療を学ぶ為に福岡にある国立病院機構九州医療センター脳血管神経内科へ2011年4月より2年間の国内留学中です。

まず、神経内科と聞くとどのようなイメージでしょうか？難しい、よくわからない、治らないなどのイメージが先行し専攻するにはちょっと…という感じでしょうか？自分も例にもれず、学生時代は自分が内科でしかも神経領域を専攻するとは考えもしませんでした。(ちなみに、学生時代に一番興味があったのは排尿障害…神経因性膀胱です。結局は神経がらみではあったのですが)。

神経の道へのきっかけは研修医1年目、何気なく選んだ1.5ヶ月の神経内科でした。まさかこの選択が今後の人生を決めるとは思いもありませんでした。まず、初日に神経診察のレクチャーで神経疾患は「病歴8割」、診察所見がいかに重要かを語る渡嘉敷崇先生の熱弁と「華麗なる打鍵器さばき」に惚れ込んでしまったことと、また受け持ちのパーキンソン病患者のon-offの症状の劇的な変化に衝撃を受けたこと。まさにKOでした。神経の道を専攻しようと考

えた次第です。しかしながら、神経疾患の奥深さに潰されてしまったことと、本格的な救急の現場が未経験であったことに対する焦りもあり、3年目は大学病院のふもとにある、「笑顔で親切」をモットーにしている某急性期病院へ内科の後期研修として入局いたしました。神経と縁が切れることはありませんでした。救急の現場では脳梗塞を始めとする脳卒中患者が多いこと、患者が多い割には専門に診療できる医者が不足している現状を肌で実感しました。脳梗塞の患者を診ていく中で再び神経を専攻したいという気持ちが芽生えてきました。同僚の先生方からの温かいご理解もあり、再び神経疾患を学ばせて頂ける機会を頂いた次第です。九州医療センター脳血管内科で得た知識、経験を沖縄県の脳卒中診療の発展に生かせたらと思っています。

最後に自分が所属する神経グループの簡単なお紹介をさせていただきます。小嶺幸弘先生(現、県立南部医療センター)時代の黎明期を経て2001年4月より渡嘉敷崇先生を主任とした体制が始まっています。当初は渡嘉敷崇先生と伊佐勝憲先生の2人体制でした。神経を志す入局者もおらず、冬の時代が長く続きました。その後、徐々に神経希望の入局者が入るようになり、現在、大学では7人体制(内、神経専門医3人、脳卒中専門医1人)となっております。他の科から見るとどう見えるのでしょうか？多いと印象を持たれる方もおられるでしょうが、沖縄県全体では神経専門医は26人、脳卒中専門医を持つ内科医は3人と需要に応えるには程遠いのが現状です。少しでも一緒に診療していただける同志が増えれば…と日々願っております。ポリクリや初期研修で少しでも興味が湧いたけど、神経が難しいと考えて少し躊躇されている方、第3内科神経グループへ昼夜問わずお気軽にお越しください。一同、心より歓迎いたします。



辰年の抱負

琉球大学医学部附属病院
高良 聖治

医師会のみなさま、あけましておめでとうございます。4順目の干支を回り始めたばかりの琉球大学精神科の高良聖治と申します。琉球大学を卒業後、精神科に入局。県内外の病院で研修を重ね、4年前に大学病院に戻り、さらなる研鑽に励んでおります。去年より医局長業務に従事することとなり、社会勉強もさせてもらっています。その中で、この頃では、下記3つの言葉が頭に浮かぶようになりました。まず一つ目は、「有意味感」という言葉です。確か筑波大学大学院産業精神医学・宇宙医学グループ教授松崎一葉先生の講演会で耳にした言葉でした。有意味感とは、例えると、与えられた仕事が本当に自分にプラスになるものなのかよくわからないけれど、将来この経験が自分の人生に生きてくるかもしれない（有意義なものになりうるかもしれない）と感ずること、そして、その上でその仕事をこなしてみるということの意味合いの言葉です。二つ目は、春日武彦先生（都立墨東病院精神科部長など歴任）の言葉で「中腰力」という言葉です。武田信玄のように相手が動くまで待つ力、と考えていいと思います。特に、精神科の分野では重要な力です。精神科で扱う患者の悩み・問題点は医療や福祉だけで解決できない事が多く、即結果を求めようとすると、逆に、ど壺にはまってしまう事があります。打てる手を打った後で、あとは時期がくるまでじっくり待つ、だらんと弛緩した状態で待つのではなく、何か起こればすぐに対応できるように中腰の姿勢で待つという力です。その間、苦しんでいる患者につきそい続けるという中腰力も要求されます。内科で例えれば、患者の生命の危険が低い時点での不明熱を原因が特定できてない段階で抗生剤を使用するのではな

く原因が特定できるまでその使用をぐっとこらえて待つ姿勢とよく似ています。その間、熱に苦しんでいる患者につきそう力も求められるかと思えます。これら2つの言葉は特に、教育や研究、組織運営の場面でよく頭に浮かぶようになりました。三つ目は、「人は壊れ物である」というフレーズです。芥川賞受賞作家の平野啓一郎氏が取材で発したフレーズでした。私は彼の小説を読んだことがないので、私の受け取ったニュアンスと彼のいうこのフレーズのニュアンスが同じかどうか定かではありませんが、とても衝撃的でした。私が臨床場面で感じていたことは、人は一度でもある一線を越えてしまっただけで壊れてしまうと、例えどんなに状況が好転したとしても、この一線を越える前の状態に戻ること（完治）はなかなかないということです（回復はできますが）。一度壊れてしまうと、元の状態に戻すことは容易なことではありません。壊れて散らばった破片がすべてみつからない可能性も十分あります。壊れずに済むにはどうすればよかったのかといった問いやその後の解決策や対応策は私の本業の負うところですが、人は生き物であり、出せる力に限りがあることを常に意識した上で人と接し、その上でマネジメントすることが管理職者には必要であると強く感じるようになりました。上記3つの言葉と人を「褒める」事が人の成長や社会の発展を支える上で欠かせないものだと思うこの頃です。

今年の抱負は、壊れない程度にお互い成長できるような周囲との関係作りや働きかけを行うことです。上記のようなたわい無い考えに時々耽けながら、これから自分はどの方向に進んで行こうかと模索する年にもなりそうです。こんな私ですが、今年もよろしくお願ひします。